福岡市早良区

田村遺跡

－Ⅳ－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集

1987

福岡市教育委員会

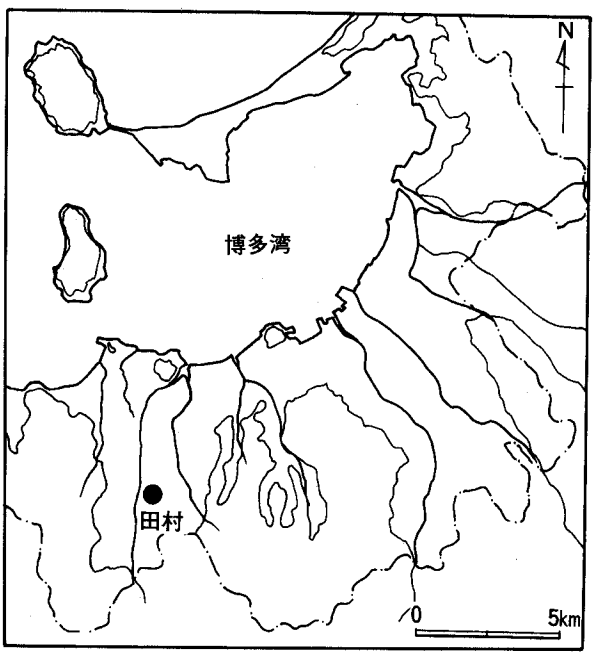
田村遺跡Ⅳ　正誤表

頁	行	誤	正
1	8	調掘調査	試掘調査

田村遺跡

— Ⅳ —

福岡市早良区田所在遺跡群の調査



遺跡略号　TMR
遺跡調査番号　8447

1987年3月

福岡市教育委員会

序　文

風光明媚な田園地帯早良平野には、豊かな自然と歴史的景観が残されています。しかし、近年の夥しい開発の波は平野の奥にまで押し寄せています。

そうした現状の中、福岡市教育委員会では、開発によって失なわれていく遺跡については、事前に発掘調査を実施し記録の保存に努めています。

今回報告する田村遺跡の周辺地域におきましても、昭和53年以来、学校や住宅等の建設に伴う発掘調査を実施してきました。本書は昭和59年12月の市道建設に伴う発掘調査報告で、記載の通り、条里遺構等が検出されました。

本書が市民の皆さまに文化財に対するご理解を深めていく上で広く活用されるとともに、学術研究の分野において貢献できれば幸いです。発掘調査から資料整理にいたるまでの地元関係者をはじめ多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表するものです。

昭和62年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　言

1．本書は福岡市早良区役所土木農林課による福岡市早良区大字田市道建設に伴い、福岡市教育委員会文化課（現埋蔵文化財課）が1984年12月に発掘調査を実施した田村遺跡群第７次調査報告である。
2．本書に掲載した遺構の実測は二宮忠司、佐藤一郎、撮影は二宮があたった。
3．本書に掲載した遺物の実測は佐藤、山村信栄、撮影は佐藤があたった。
4．製図は佐藤、山村、藤村佳公恵が行なった。
5．本書の執筆は、Ⅲ－４石器の項を山村、残りを佐藤が行なった。
6．本書に使用する基準方位は磁北で、真北との偏差Ｎ6°40′Ｗである。
7．本書の編集は佐藤が行なった。

本　文　目　次

序

Ⅰ　はじめに …… 1

1　調査にいたる経過 …… 1

2　調査の組織 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 3

Ⅲ　調査の記録 …… 3

1　調査の概要と経過 …… 3

2　Ⅰ区の調査 …… 5

検出遺構 …… 5

出土遺物 …… 9

3　Ⅱ区の調査 …… 15

検出遺構 …… 15

出土遺物 …… 19

4　Ⅲ区の調査 …… 20

検出遺構 …… 20

出土遺物 …… 21

Ⅳ　小　　結 …… 26

挿　図　目　次

本文頁

第１図　周辺の遺跡 …… 2
第２図　田村遺跡群と調査地点 …… 4
第３図　Ⅰ区全体図 …… 6
第４図　柵・土壙実測図 …… 6
第５図　Ⅰ区南壁・東壁土層実測図 …… 7
第６図　Ⅰ区出土遺物実測図 (1) …… 8
第７図　Ⅰ区出土遺物実測図 (2) …… 10
第８図　Ⅰ区出土遺物実測図 (3) …… 12
第９図　Ⅰ区出土遺物実測図 (4) …… 14
第10図　Ⅱ区南壁土層実測図他 …… 15
第11図　Ⅱ区全体図 …… 16
第12図　竪穴住居跡実測図 (1) …… 17
第13図　竪穴住居跡実測図 (2) …… 18
第14図　Ⅱ区出土遺物実測図 …… 19
第15図　Ⅲ区全体図 …… 21
第16図　Ⅲ区出土遺物実測図 (1) …… 21
第17図　Ⅲ区出土遺物実測図 (2) …… 22
第18図　Ⅲ区出土遺物実測図 (3) …… 23
第19図　各区出土石器実測図 …… 24
付　図　田村遺跡第７次調査区全体図 (1/200)

図　版　目　次

図版１　田村遺跡群空中写真

図版２　(上) Ⅰ区調査区全景（北から）　(下) Ⅰ区調査区全景（南から）

図版３　(上) Ⅰ区南側土層状態　(下) Ⅰ区東側土層状態

図版４　(上) Ⅱ区調査区南側（北から）　(下) Ⅱ区調査区全景（南から）

図版５　(上) Ⅱ区　竪穴住居 SC01（北から）　(下) Ⅱ区　竪穴住居 SC02（南から）

図版６　(上) Ⅲ区調査区北側（北から）　(下) Ⅲ区調査区北側（南から）

図版７　(上) Ⅱ区調査区全景空中写真（北から）　(下) Ⅱ区調査区全景空中写真

図版８　Ⅰ区出土土器

図版９　Ⅰ区出土陶磁器(1)

図版10　Ⅰ区出土陶磁器(2)

図版11　Ⅰ区出土陶磁器(3)

図版12　Ⅱ区　SC01・SC02・SD01 出土土器　Ⅲ区　Pit 3 出土陶磁器

図版13　Ⅲ区　SX01 出土土器

図版14　Ⅰ区出土滑石製石鍋　Ⅲ区　SX01 出土ガラス小玉
出土石器

図版15　第５次調査区全景空中写真（北から）

Ⅰ はじめに

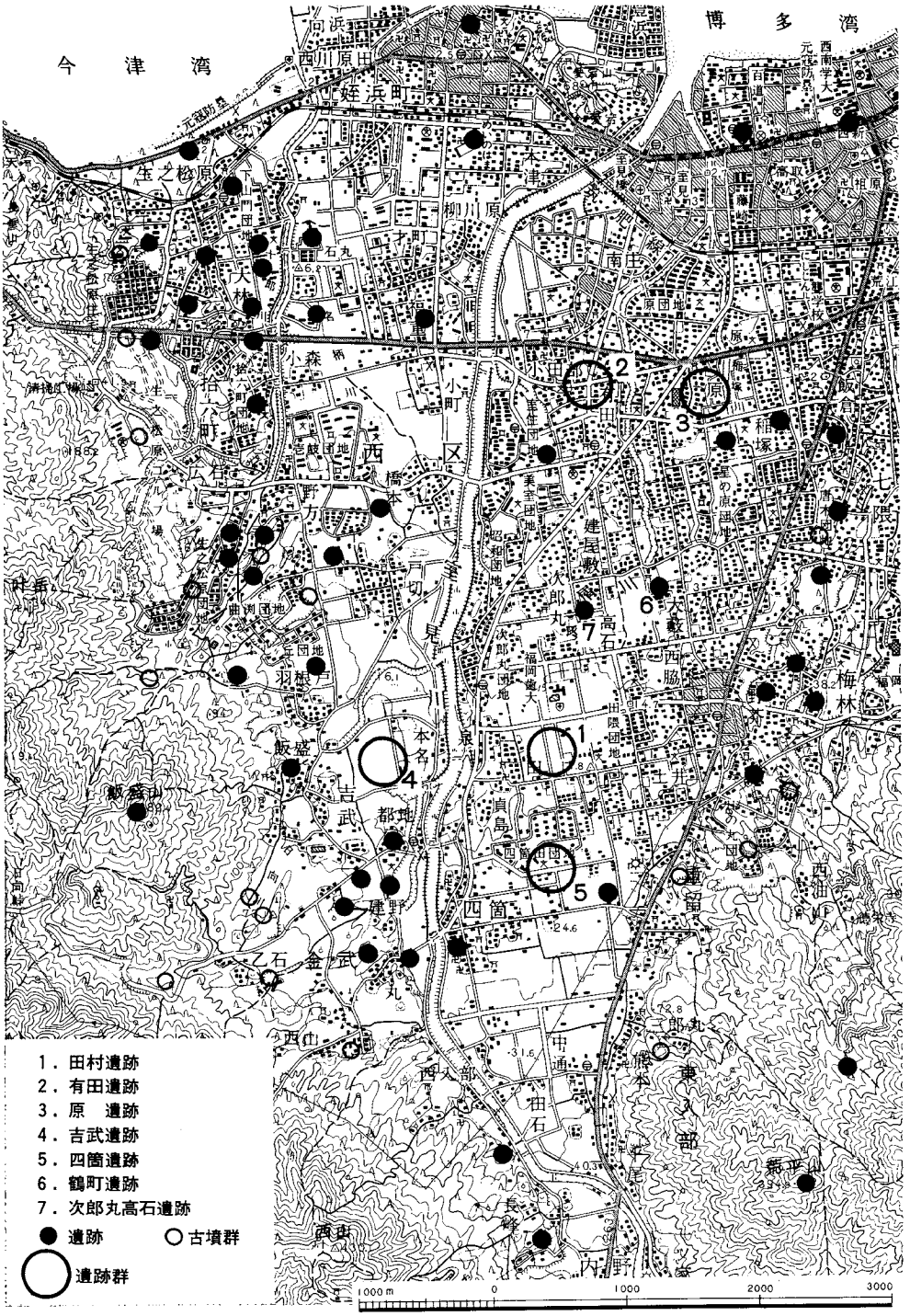
1　調査にいたる経過

早良平野では、水田畦畔、農道、水路等に条里制がよくとどめられている。現況の道路の多くは、条里遺構を踏襲して営なまれており、1町(109m)四方の区画が碁盤目状に整然と広がっている。今回の調査地点は既設の農道を拡幅整備する市道建設に伴うもので、前述した例にあたる。担当課の早良区役所土木農林課より、計画を進める段階で教育委員会文化課に対し埋蔵文化財の有無についての照会が申請された。これを受けて文化課では、昭和59年11月14、15日に試掘調査を実施した。建設計画は、幅約2mの農道を総延長337.5mにわたって幅7.5mに拡幅するもので、用途面積2530㎡に及ぶ。調掘調査の結果、その内の南端より40m分と北端より200m分の1800㎡が調査対象区域として設定された。市道建設は急を要するもので、協議の結果、当該地から東へ約100m東の地点の田村小学校建設予定地内（田村遺跡群第5次）発掘調査班が急拠、続行中の調査と併行して発掘調査を担当することとなった。

2　調査の組織

調査委託　福岡市早良区役所土木農林課
調査主体　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係
調査総括　文化課長　生田征生
　　埋蔵文化財第1係長　柳田純孝
事務担当　岡島洋一
調査担当　山崎龍雄（試掘調査）・二宮忠司・佐藤一郎（発掘調査）
発掘作業　牛尾豊・太田孝房・尾崎達也・鬼丸邦宏・榊太郎・榊光雄・柴田大正・広田義美・藤崎友記・結城弥澄・伊藤みどり・牛尾秋子・牛尾シキヨ・牛尾奈美枝・牛尾二三子・大内文恵・大庭友子・大穂朝子・大穂栄子・尾崎八重・金子ヨシ子・菊地栄子・菊地ミツヨ・菰田洋子・榊スミ子・清水文代・正崎由須子・杉村文子・惣慶トミ子・多田映子・典略初・中牟田サカエ・鍋山千鶴子・西島タミエ・西島初子・西納テル子・西納トシエ・能美八重子・浜田澄美枝・林嘉子・平田政子・平野ミサオ・藤タケ・細川ミサヲ・真名子ユキエ・真鍋チエ子・八尋君代・山下サノエ・山西人見・結城君江・結城シズ・結城千賀子・結城信子・吉岡員代・吉岡タヤ子・吉岡蓮枝・米嶋ハツネ・脇坂ミサヲ
整理作業　尾崎京子・斉藤美紀枝・平田ミサ子・藤崎洋子・藤村佳公恵・真名子順子

この他にも、排土置き場の確保等に関し地元の多くの方々のご理解とご協力によって、調査が支障なく行なわれたことを、感謝します。



第１図　周辺の遺跡（1/5万）

Ⅱ　遺跡の立地と周辺の遺跡（第１図）

田村遺跡群は福岡市早良区大字田に所在し、早良平野の中央に位置している。早良平野は広義の福岡平野の西部にあたる。早良平野の西を背振山系から北へ脈生する叶岳、長垂山塊、東を油山山系から北へ続く平尾丘陵で限られる。その中央部を貫流する室見川を中心とする河川の沖積作用によって、その大部分を形成された北側に開く扇形の平野である。

田村遺跡同様に平野中央部の沖積地に立地する遺跡として、原遺跡、鶴町遺跡、次郎丸高石遺跡、四箇遺跡等があげられる。微高地では集落、墓地等の生活遺構が、低湿地では杭列・柵状遺構等の水田に伴うとみられる水利遺構が検出されている。

田村遺跡群では下の表に示す通り、開発に伴い1978年から７次にわたって発掘調査を実施してきた。第４次調査までの概要は既刊の報告書で述べられているので、ここではふれない。第５次調査以降の概要は、関連する点について逐次本文中で述べてゆく。

Ⅲ　調 査 の 記 録

１　調査の概要と経過

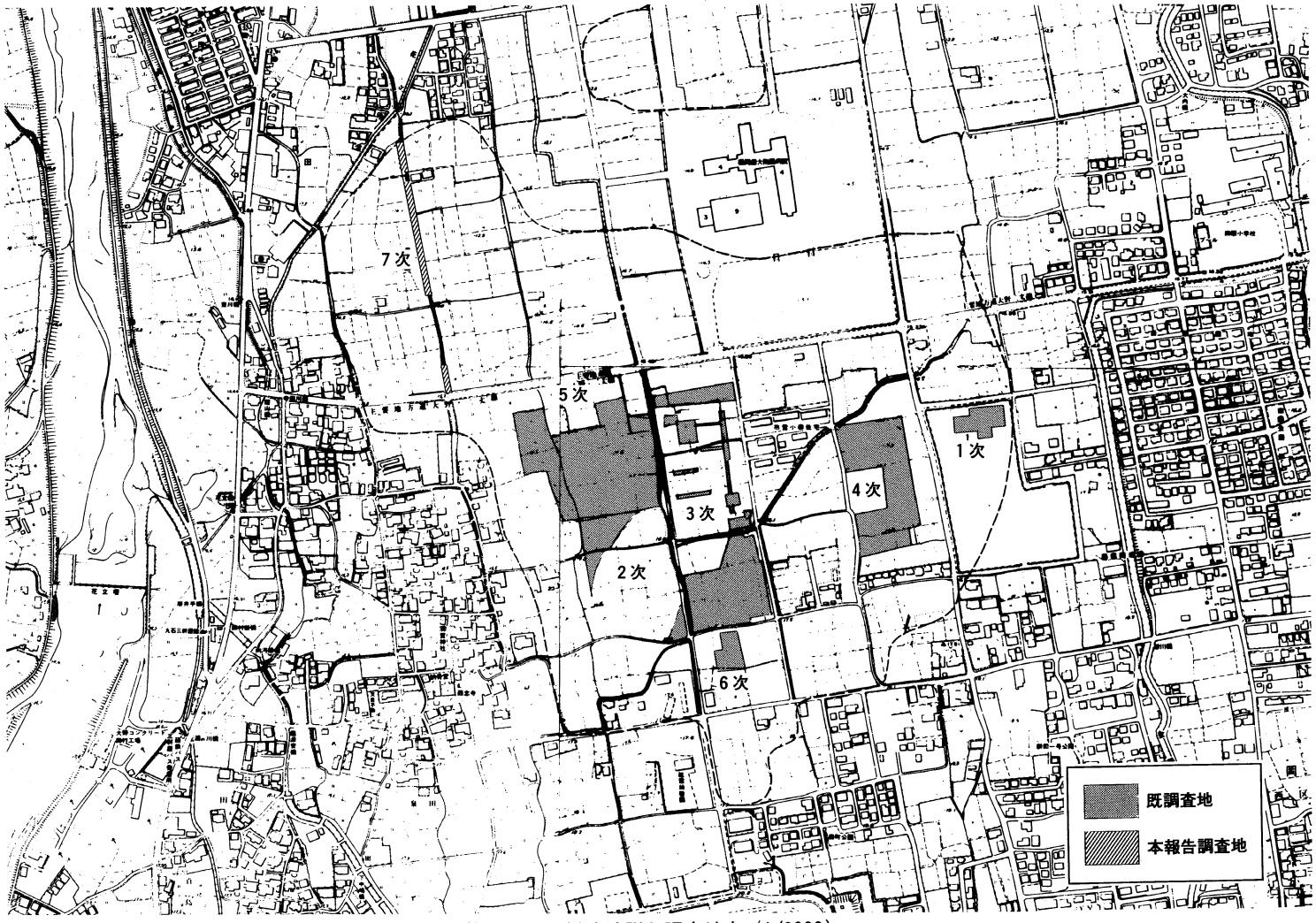
田村遺跡の第７次調査は、12月１日から着手された。調査対象範囲は試掘調査によって３区域が設定され、南側からⅠ、Ⅱ、Ⅲ区と呼称することにした。調査区域はそれぞれ幅7.5ｍで、南北の長さがⅠ区40ｍ、Ⅱ区160ｍ、Ⅲ区40ｍで、総面積は1,800㎡である。

調査区域は農道とそれに伴う水路に沿って設定されており、Ⅰ区からバックホーによって盛土および表土を剝ぐことで作業を開始した。その結果、Ⅰ、Ⅱ区では一部が現況の水路によっ

田村遺跡発掘調査一覧表

調査次数	調査地区地点	調査面積(㎡)	調　査　期　間	備　　考
1	高柳[註1]	3,000	78.10.11～78.12. 2	学校建設にともなう
2	第１・２地点[註2]	2,650	80.12. 5 ～81. 4 .14	共住建設にともなう
3	第3・4・5地点	12,820	81. 4 .22～82. 5 .15	共住建設にともなう
4	第８地点	8,500	83. 1 .20～83. 6 .15	共住建設にともなう
5	第10地点	17,000	84. 9 . 1 ～85. 7 . 6	学校建設にともなう
6	第11地点	800	84. 8 . 1 ～84. 9 .10	店舗建設にともなう
7	**第12地点**	**1,800**	**84.12. 1 ～84.12.29**	**道路建設にともなう**

註１）福岡市教育委員会『高柳遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集　1981
註２）福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集　1982
　　福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅱ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集　1984



第2図　田村遺跡群と調査地点（1/8000）

て攪乱されているが、農道と平行する溝、Ⅰ区の西側ではその溝と同時期とみられる土壙、柱穴を検出した。Ⅱ区の北端では竪穴住居跡、Ⅲ区ではピット群を検出した。

早良平野では、畦畔、農道、水路などが1町(109m)四方に区画割された条里制遺構がみられ、その条里方位はN10°Wである。Ⅰ、Ⅱ区で検出された溝（以下SD01と呼称する）は条里遺制が残る農道、水路の下面から検出されたもので、条里制に関わる溝とみられる。学校建設に伴う第5次調査区域内では、本調査で検出されたSD01溝と平行する溝が1町東で検出されており、時期を同じくしている。(第2図)

2　Ⅰ区の調査（第3図）

検出遺構（第4図）

Ⅰ区ではSD01のほか、その西側で、SD01を切る溝SD02、同時期とみられる柵SA01、土壙SK01、02、03、04を検出した。

柵（第4図）

SA01　調査区西南隅で、径60～90cm、深さ約30cmの柱穴が、ほぼ南北方向に、柱間175cmの等間隔で2間分並んでいることから柵とした。南側の調査区外に延びると考えられる。あるいは西側の調査区外に同様の柱穴があって掘立柱建物の一部とも考えられる。柱穴埋土からは、瓦器椀片が出土した。

土壙　SK01～04は調査区西端で検出したがその西側は調査区外にかかり、SK03はSD02に切られているため、平面形態および規模は不明。(第4図)

SK01　深さは20cmで、土師器皿・杯片、同安窯系青磁皿が出土した。

SK02　深さは28cmで、土師器皿・杯片が出土した。

SK03　深さは50cmで、瓦器皿、滑石製石鍋底部片が出土した。

SK04　深さは42cmで、土師器杯片・瓦器椀片が出土した。

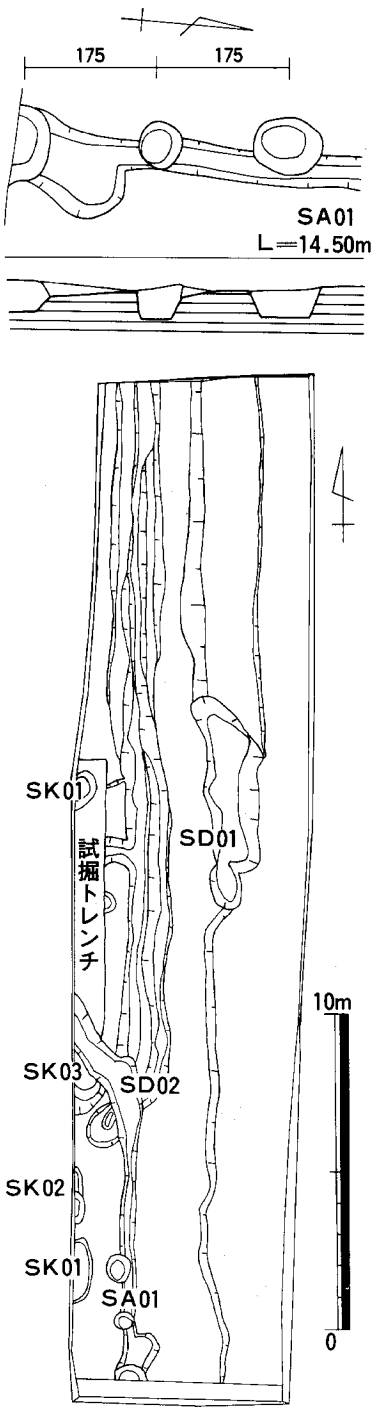
溝

SD01　調査区の中央で検出した主軸をN10°Wにとる溝である。Ⅰ区では延長32m検出した。幅2.7～3.2m、深さ15cmを測る。断面形は台形を呈する。底面から、土師器皿・杯片・瓦器椀片・白磁片・青磁片・滑石製石鍋片・鉄滓などが出土した。

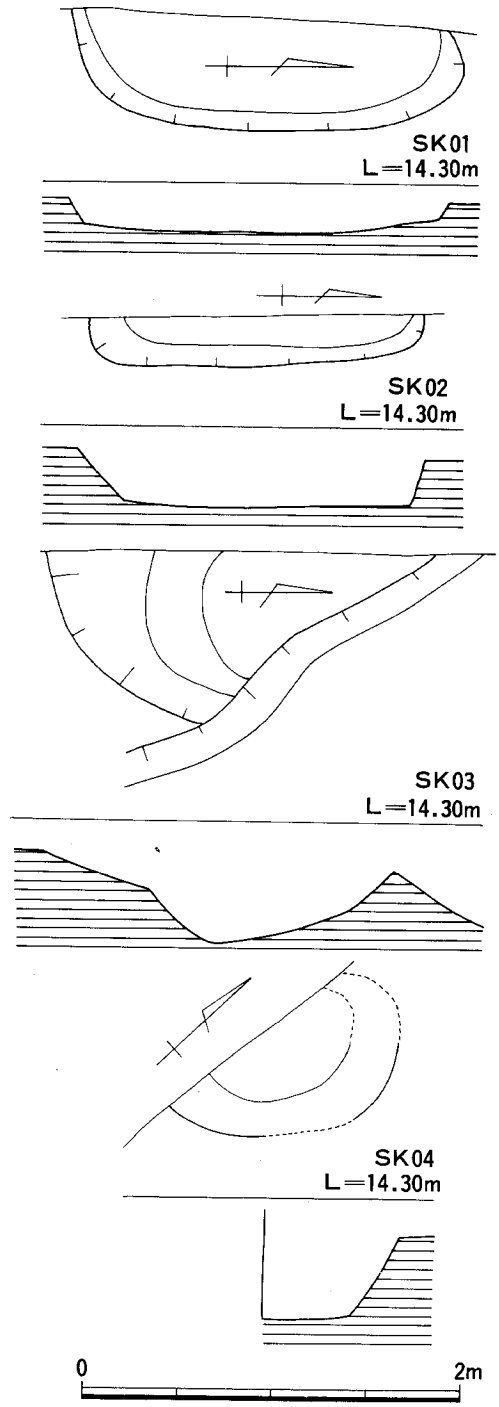
SD02　調査区南端からSD01を切って平行に走り、南端から10mで西側へ屈曲し、調査区外へ至る。幅は南端から7mの区間で40～50cm、屈曲部付近は1m、深さ15cmを測る。瓦器皿・龍泉窯系青磁椀片が出土した。

以下、Ⅰ区内の土層堆積について述べる。(第5図)

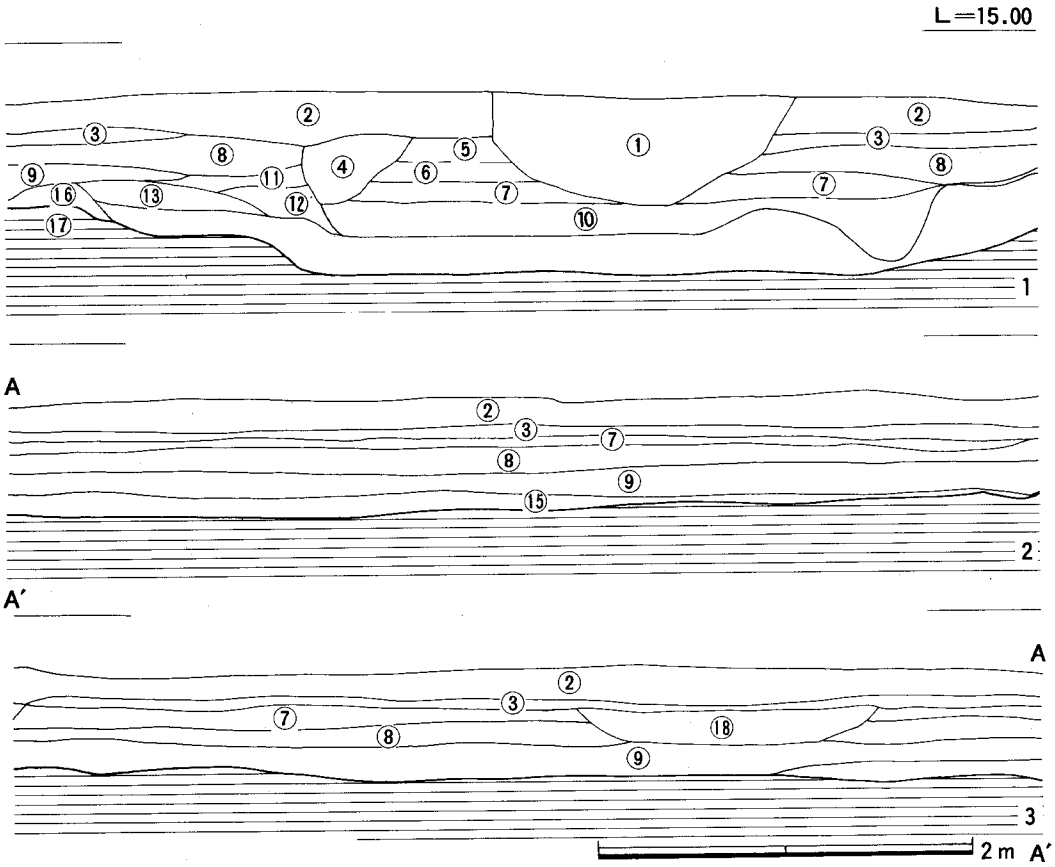
1は南壁の土層実測図で、SD01の断面を切っている。①は現況の農道に伴う水路、②は現況の耕作土、③は②の床土、④は砂と灰褐色シルトで⑤、⑧から掘り込まれている。⑤は茶褐



第3図　Ⅰ区全体図（1/250）



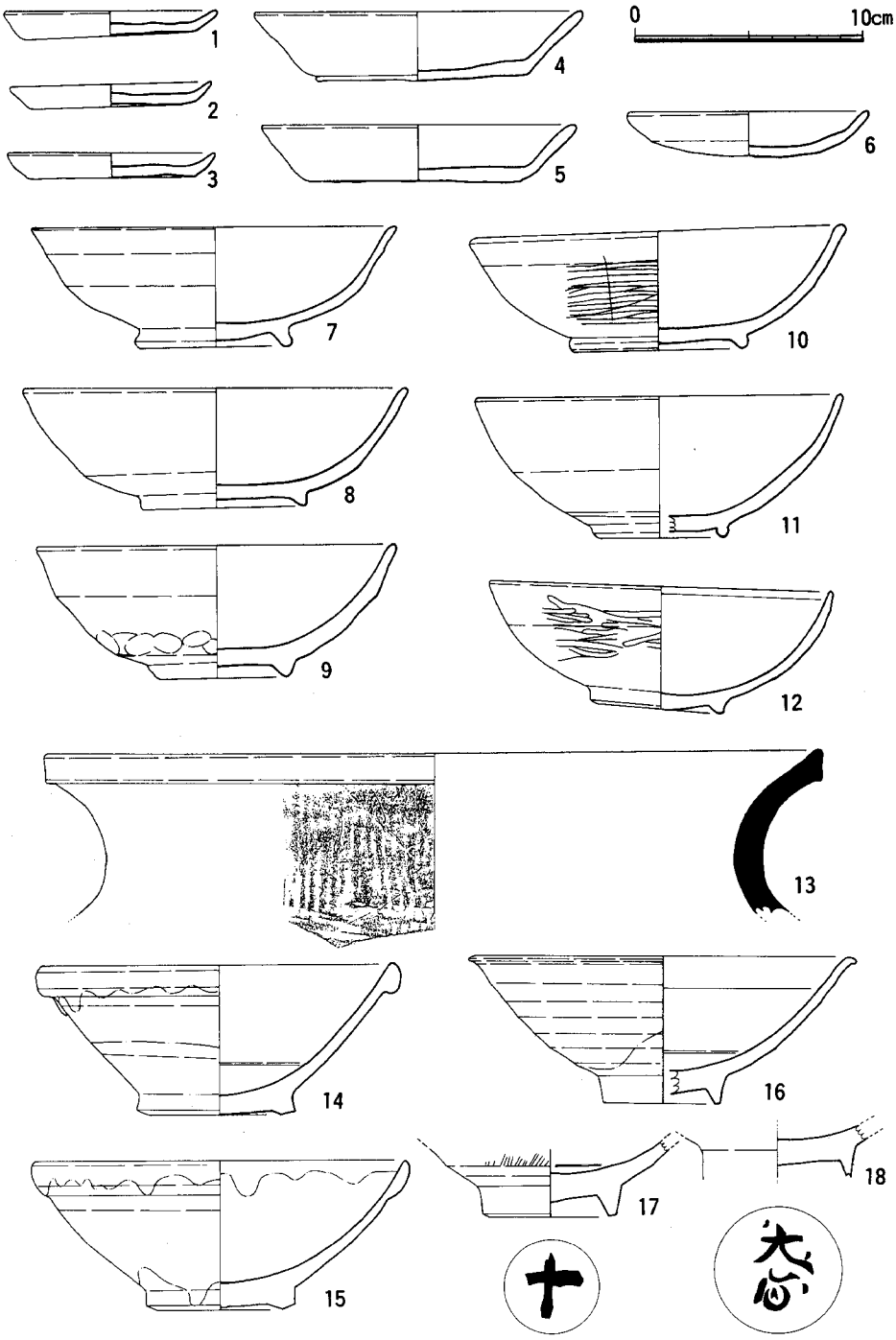
第4図　柵（1/100）土壙実測図（1/40）



第５図　Ⅰ区南壁・東壁実測図（1/40）

色シルト、⑥は黒斑を含む褐色土、⑦は円礫を含む砂礫で、⑤～⑦はほぼ水平に堆積しており、後世農道を営んだ際の盛土とみられる。⑧は暗灰褐色土で一時期前の水田耕作土、⑨は明黄褐色土で⑧の床土にあたる。⑩～⑲はSD01の埋土で、⑯の地山黄褐色シルト層から掘り込まれている。⑩は円礫を含む砂礫、⑪は灰褐色土、⑫は酸化鉄を含む褐色土、⑬は砂と小石を含む灰褐色土、⑭は酸化鉄を多量に含む灰褐色シルトで上面には酸化鉄の２㎝の層がみられる。図の左端の地山の高まりは水田畦畔の可能性が考えられる。その下層の⑰は黒斑や酸化鉄を含む褐色土である。⑯、⑰では遺物は包含されていない。

２・３は東壁の調査区南端からの実測図で、南壁から引き続いて②③⑦⑧の堆積が認められ、２時期にわたる水田経営の跡がみられる。⑱は灰褐色土で⑦から掘り込まれている。⑨の下層⑮は砂を含む褐色土である。



第６図　Ⅰ区出土遺物実測図 (1) (1/3)

出土遺物（第６～９図）

Ⅰ区出土遺物の大半を占めるSD01出土遺物を中心として報告する。

土師器　**1**～**5**はSD01出土。（第６図）

皿　**1**は口径9.1cm、器高1.1cm、底径7.2cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、色調は淡黄褐色を呈する。体部は横ナデ、内底にはナデが見られる。底部はヘラ切りで板状圧痕が見られる。**2**は口径8.7cm、器高1.0cm、底径6.7cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、色調は明赤褐色を呈する。体部は横ナデ、内底にはナデが見られる。底部の切り離し方法は磨滅により不明である。板状圧痕が残る。**3**は口径9.9cm、器高1.1cm、底径7.2cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、色調は淡赤褐色を呈する。体部は横ナデ、内底にはナデが見られる。底部は糸切りで板状圧痕が見られる。

杯　**4**・**5**の体部は横ナデ、内底には横ナデが見られる。底部は糸切りで板状圧痕が見られる。**4**は口径（復元）13.4cm、器高2.5cm、底径9.5cmを測る。胎土には細かい砂粒を含み、色調は淡赤褐色を呈する。**5**は口径（復元）13.4cm、器高2.5cm、底径9.5cmを測る。胎土には粗い砂粒を含み、色調は明赤褐色を呈する。

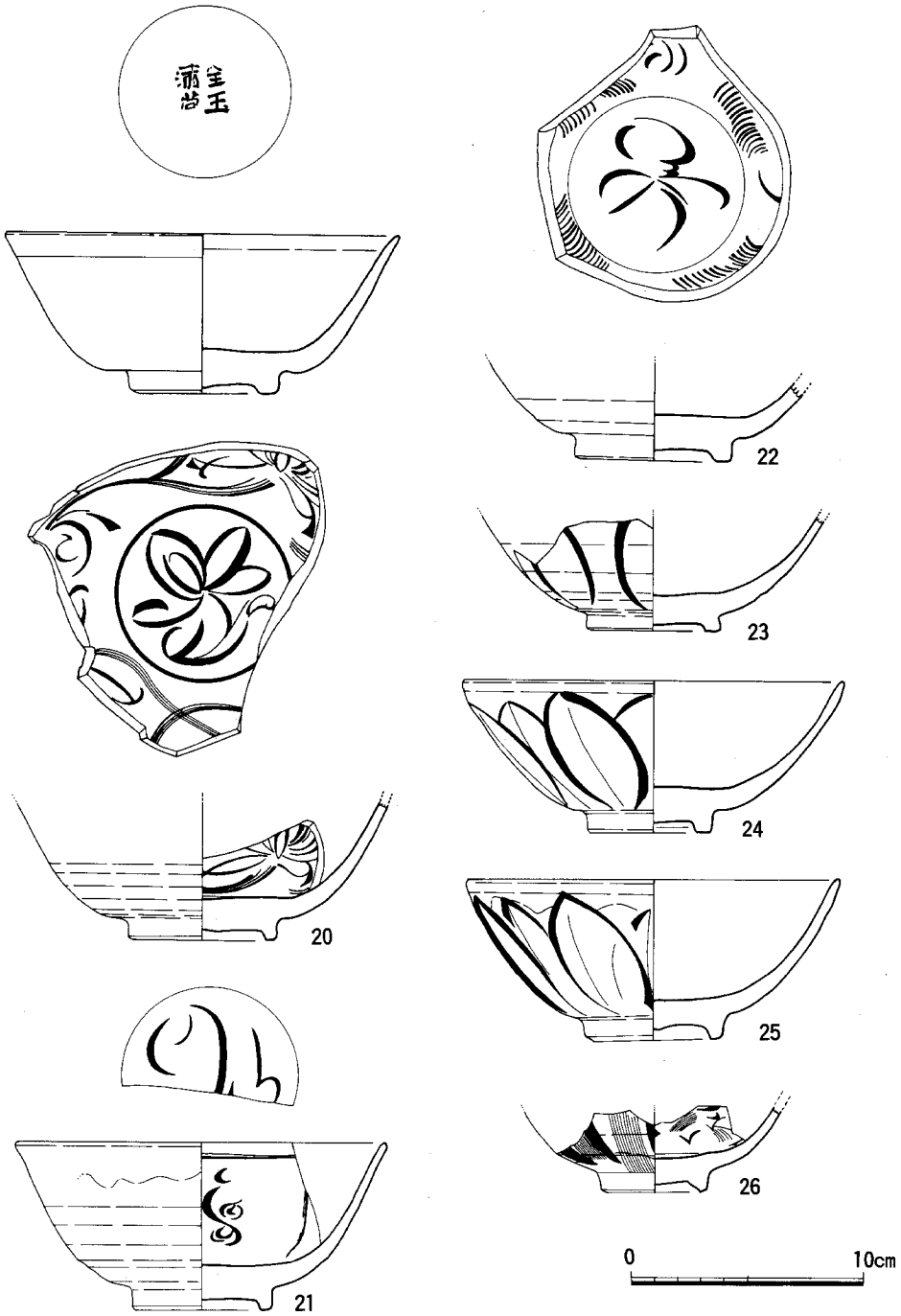
黒色土器　**7**はSD01出土。（第６図）

椀　**7**は、体部中位よりやや下が屈曲し、口縁部は軽く外反する。「ハ」字形の高台をもつ。内面にヘラ磨キが施されているが、磨滅により部分的にしか観察できず、外面の調整は不明。胎土に細かい砂粒を多量に含み、色調は黒色を呈する。

瓦器　**8**～**11**はSD01溝、**12**はSD02溝出土。**6**はSK03土壙出土。（第６図）

皿　**6**は口径10.4cm、器高1.9cm、底径8.5cmを測る。体部外面にはヘラ磨きが見られるが、内面は磨滅により調整は不明。底部は糸切りで板状圧痕が見られる。胎土には砂粒を含み、色調は口縁部内面から外面にかけて灰黒色、内底は灰白色を呈する。

椀　**8**は器形の上から瓦器に分類したが、土師質である。体部下半の屈曲部が肥厚し、体部外面下位に指頭圧痕が見られる。断面逆台形の低い高台をもつ。磨滅が著しく調整は不明。胎土には粗い砂粒を含み、色調は赤褐色を呈する。**9**は厚手の器肉で、口縁部が外反、体部中位の屈曲部が肥厚し、体部外面下部には指頭圧痕が見られる。断面半円形の太目の高台をもつ。体部外面中位から内面にかけてヘラ磨きを施す。胎土には細かい砂粒を少量含み、色調は灰黒色を呈する。**10**は体部に丸味をもち、口縁部が軽く外反する。高台は「ハ」字形に張っているが、低く径は7.8ｍと大きい。高台の上付近から内面にかけて、ヘラ磨きを施す。胎土は精良で、色調は外面から口縁部内面にかけて灰黒色、内面の口縁部より下が淡黄褐色を呈する。**11**は体部に丸味をもつ深目のもので、体部下半が肥厚している。断面半円形の高台をもつ。磨滅により調整がよく観察できないが、体部にはヘラ磨きが施され、体部外面下半に凹凸（指頭圧痕か）がみられる。胎土には砂粒を少量含み、色調は口縁部内外面ともに灰黒色、その他の部位は灰



第７図　Ⅰ区出土遺物実測図 (2) (1/3)

白色を呈する。12は体部に丸味をもち、口縁部外面より下には凹凸がみられる。高台は逆台形で低い。口縁部内面に沈線をもち、体部内外面に横方向、内底に一方向のヘラ磨きを施す。胎土には細かい砂粒を少量含み、色調は全体的に灰色で、一部に銀色の光沢が見られる。

須恵器（第6図）

甕　13はSD01出土。緩く「く」の字形に屈曲する口頸部片で、外面は太目の平行条線状叩き、内面にはナデを施す。胎土には粗い砂粒を含み、色調は暗青灰色を呈する。

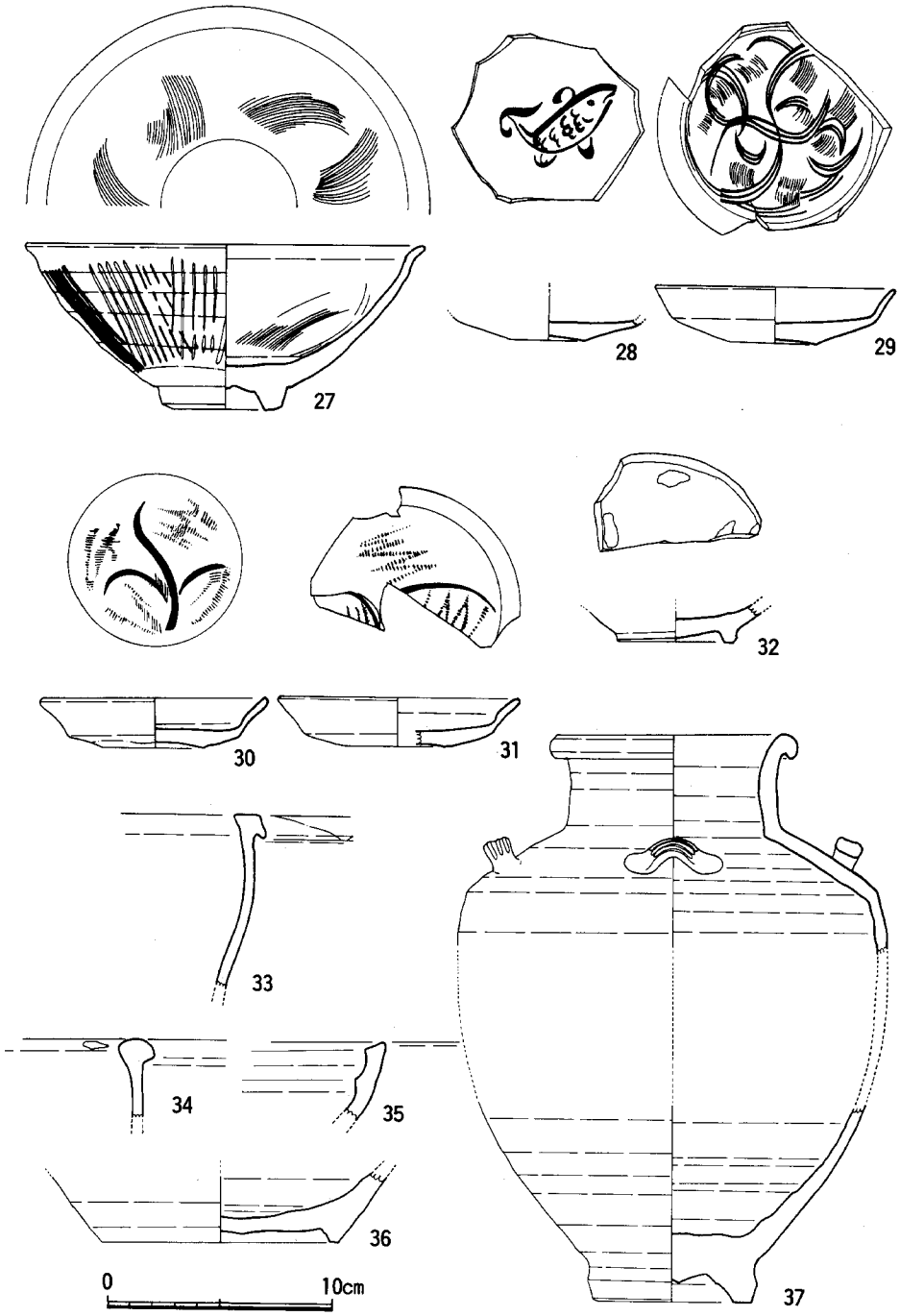
白磁　14～18・37はSD01出土。(第6・8図)

椀　14・15は口縁部を玉縁にし、高台の削り出しは浅い。体部外面下半以下には施釉されていない。胎土はやや粗く。灰白色を呈する。釉調は灰白色を呈する。14はやや厚目に施釉され、口縁部外面に釉が垂下し、内面見込みに沈線状の段をもつ。15は口縁部内外面とも釉が垂下し、内面見込みには沈線状の段は見られない。玉縁の端部は強くなでられ、折り返しの重なり目は不明瞭である。16の口縁部は外反し、端部を水平にする。体部内面上位に沈線、内面見込みに沈線状の浅い段をもつ。高台はほぼ直立し、細く高い。胎土は灰白色、釉は灰白色を呈し、体部外面下半まで薄く施釉される。17・18は底部片で、高台内に17は「十」の墨書があり、18にも墨書があるが判読できない。

四耳壺　37は胴部最大径を上位にとり、肩が張る。高台は大きく削り出される。胎土は灰黄色で、釉は淡緑灰色で高台付近まで施釉される。

青磁　19・22～28・29・31・32はSD01、20・29はSK01、20はSD02出土。(第7・8図)

椀　19～26は龍泉窯系青磁で、断面四角形の高台をもち、高台畳付より内側には施釉されず、高台内に目跡が残る。19は体部内外面とも無文であるが、内底見込みに「金玉満堂」の印文をもつ。胎土は灰色で、釉は青味を帯びた緑色を呈する。20は体部内面に蓮花劃花文、内底見込みに蓮花を片彫りする。胎土は灰色で、釉は青味を帯びた緑色を呈する。21は内底見込みに花文を片彫りし、口縁部が欠失しているが、体部内面にはヘラや櫛状施文具によって花文を施している。胎土は灰色で、釉は黄味を帯びたオリーブ色を呈する。22は体部内面を縦線で区分した中に雲文、内底見込みに文様を片彫りしている。口縁部の残存が少ないため、輪花の有無は不明。胎土は灰色で、釉は淡緑色を呈し、口縁部外面に垂下している。23は体部外面にヘラによって蓮弁を片彫りしている。胎土は灰黄色で、釉はオリーブ色を呈する。24・25は体部外面に鎬蓮弁を有する。24の胎土は灰黄色で、釉はオリーブ色を呈する。25の鎬は鋭さを欠く。胎土は灰色で、釉は淡緑色を呈する。26は体面外面にヘラによって蓮弁を片彫りし、その上から縦に櫛目を施している。体部内面にはヘラと櫛状施文具によって施文している。胎土は灰色で、オリーブ色を帯びた透明ガラス質の釉が体部外面下半までかけられている。27は同安窯系青磁で、口縁部は軽く外反し、体部内面には櫛状の施文具で孤線文を施し、体部外面にはヘラによって平行条線を片彫りしている。胎土は灰黄色で、釉はオリーブ色を呈し、体部外面下半までか



第８図　Ⅰ区出土遺物実測図 (3) (1/3)

けられている。32は越州窯系青磁で、輪高台をもち、高台外面から高台内にかけての削りはあらい。内面見込みと高台内に目あとを有す。胎土は灰色で、釉は緑色を呈する。

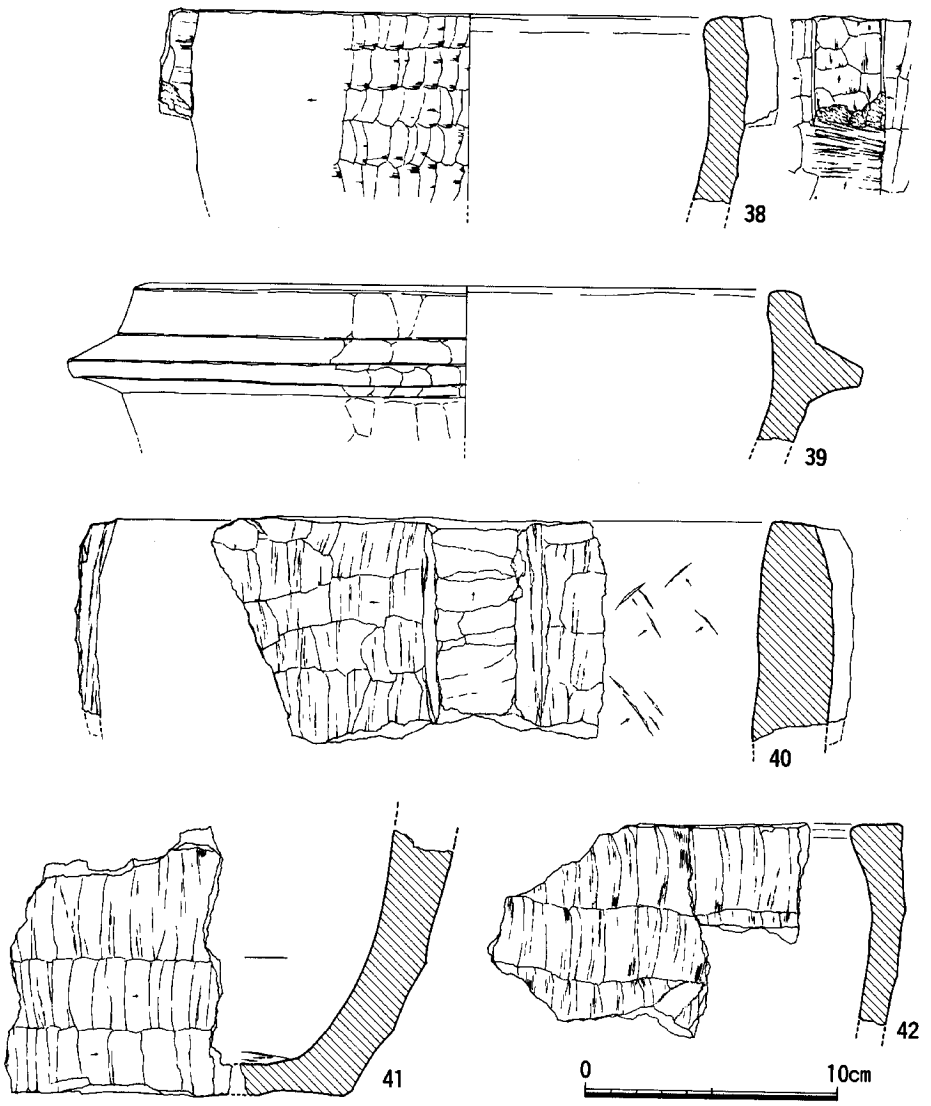
皿　28・29は龍泉窯系青磁で、全面施釉した後に外底の釉をカキ取り露胎としている。28は体部中位より上部が欠失。内底見込みにヘラで游魚を片彫りしている。胎土は灰色で釉は緑色を呈する。29は体部中位で屈曲し、内底見込みに櫛状施文具で草文を施している。草文の芯は左回りでつなぎの山は二つ。胎土は灰色で、釉は淡オリーブ色を呈し透明ガラス質。30・31は同安窯系青磁で、体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段を有す。内底見込みに、ヘラによる片彫りと櫛状施文具による雷光文を施す。胎土は灰色で、釉は緑灰色を呈する。30は体部外面下半まで施釉され、31は全面施釉した後に外底の釉をカキ取り露胎としている。

陶器　33～36はSD01出土。33は口縁折返しの玉縁をもつ盤で口縁上部に目跡をもつ。口縁部外面から内面にかけて緑灰色の釉がかけられる。胎土には粗い白色砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。34・36は褐釉陶器で、34は鉢口縁部片で内面に目跡をもつ。胎土は赤褐色を呈する。35は底部片で、外面底部付近に目跡をもつ。胎土は灰色を呈する。35は捏鉢口縁部片で口縁端部を内側に肥厚させ、その下に一条の突帯状の隆起をもつ。胎土には粗い白色砂粒を多量に含み、色調は紫灰色を呈する。(第8図)

出土遺物法量表

	口　径	器　高	底径・高台径	21			5.7
7	15.7*	5.3	6.9	22	15.7*	7.2	6.0
8	15.8*	5.2	6.6	23			5.9
9	15.5*	5.8	6.6	24	16.2	6.7	5.4
10	15.9	5.3	7.8	25	15.8*	6.8	5.9
11	15.8*	6.2	5.9	26			4.8
12	14.8*	5.3	5.9	27	17.2*	7.3	5.7
13	33.6*			28	10.5	3.7	2.5
14	15.2	6.5	6.9	29			3.2
15	16.7*	6.5	6.5	30	9.7*	2.2	4.5
16	16.0*	6.5	5.1	31	10.6*	2.2	4.5*
17			5.9	32			
19	16.6*	6.9	6.5	36			10.4
20			6.4	37	10.0*		7.1

単位 cm　　*印 復元した数値



第９図　Ⅰ区出土遺物実測図 (4) (1/3)

滑石製石鍋　38～40・42はSD01、41はSD03出土。(第９図)

38～40は器周残存約1/5の破片資料である。38・39は内湾する体部をもつ。38は方形の耳をもち、39は口縁部下に鍔をめぐらす。40は直立する体部に方形の耳をもつ。41は底部片で、外面にはススの付着がみられる。42は直立する体部に、肥厚する口縁部をもつ。いづれも口縁上端部および器内面は丁寧な研磨仕上げ、外面は、39～40・42が図上右から左へ、41は左から右へ数段のノミによる削痕がみられる。

3　Ⅱ区の調査（第11図）

検出遺構

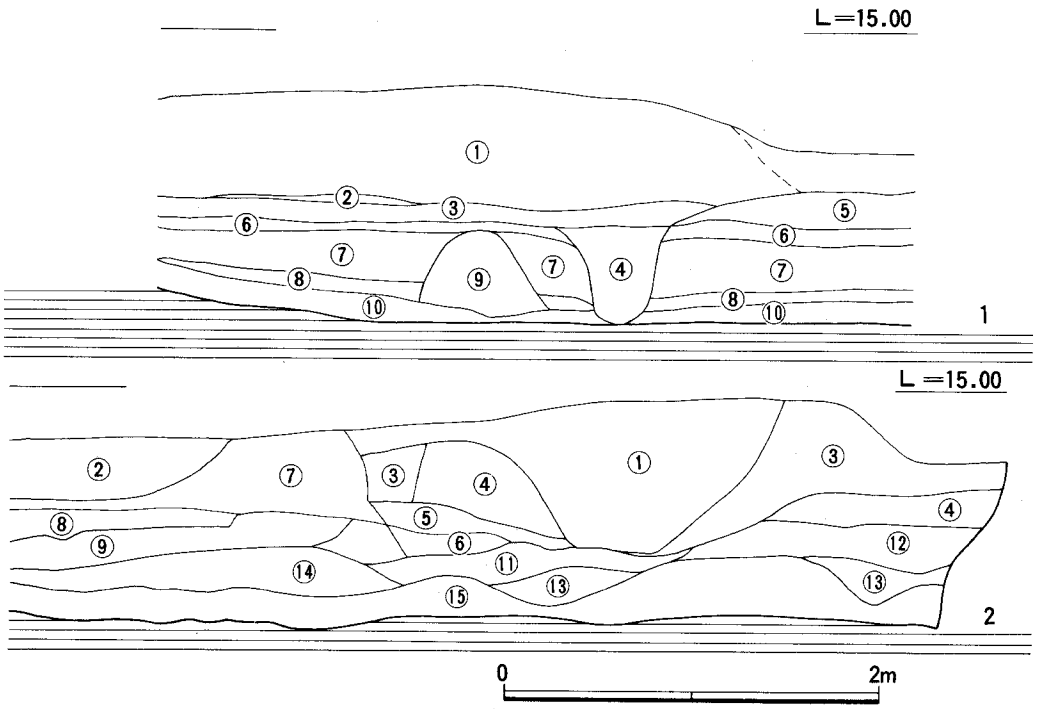
Ⅱ区では、Ⅰ区で検出したSD01の延長の溝、それと直交する溝SD03、調査区北端で竪穴住居跡SC01、02を検出した。SD01の両脇では土壙、柱穴等の遺構は検出されなかった。

溝

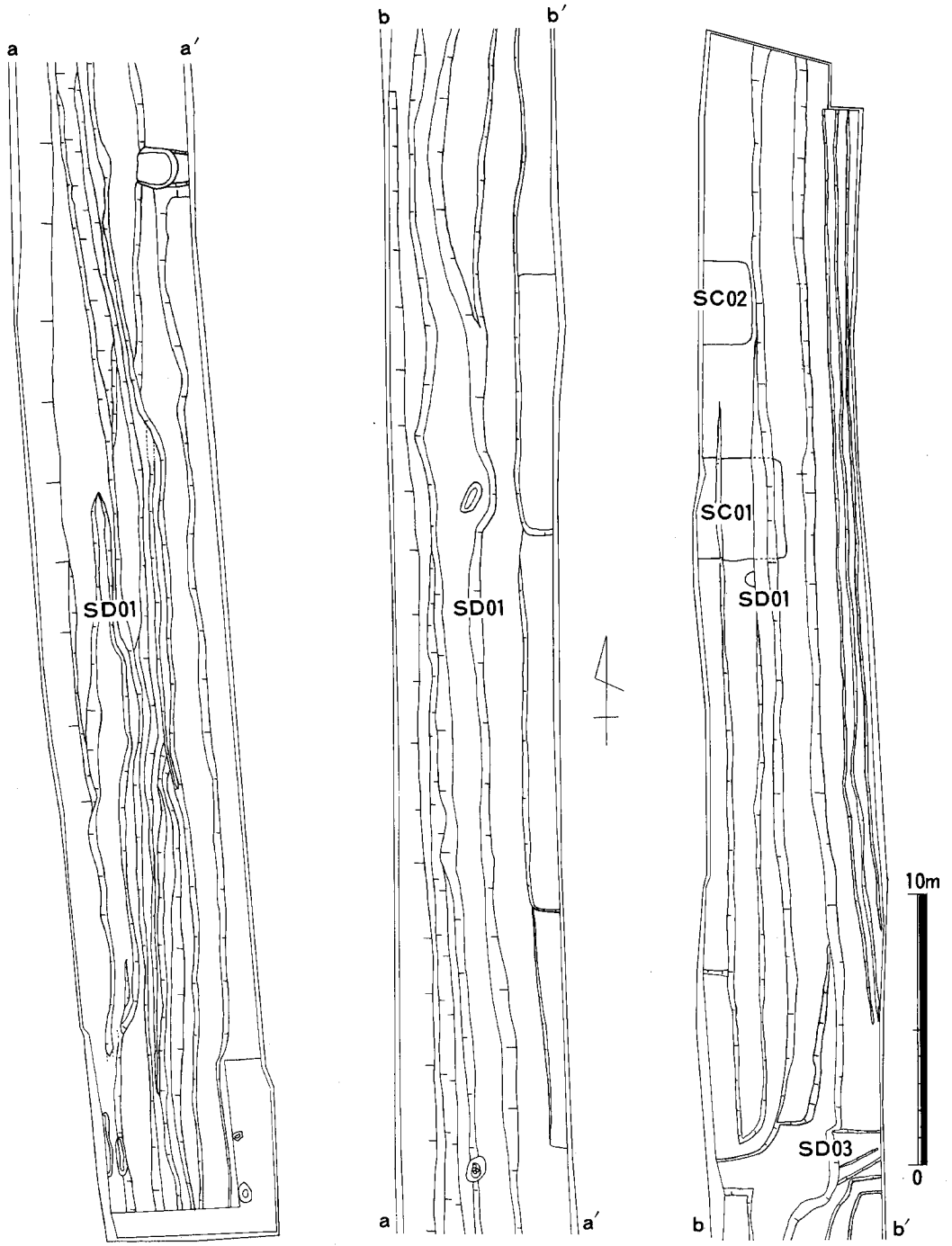
SD01　Ⅰ区と同様、調査区の中央で検出した。Ⅱ区では延長131ｍ検出した。幅２～３ｍ、深さ15～30㎝を測る。遺物の出土は、Ⅰ区内と比して格段と少なくなり、出土した土器のほとんどは磨滅した細片である。最も下る時期の遺物としては、Ⅰ区でもみられた糸切り底の土師器杯、皿の細片である。

SD03　Ⅰ区の南を東西に横断する県道大野二丈線は、Ⅰ－１で述べた例に漏れず、条里の遺制が残る農道を踏襲して営まれたものである。その道路から北へ２町(218ｍ)の地点で、SD01と直交する溝SD03を検出した。幅1.2㎝、深さ15～25㎝を測り、南北方向のSD01に比べ小規模である。

SD01とSD03が交差する東南隅からは水田の端部とその畦畔を検出した。残存する畦畔の幅



第10図　Ⅱ区南壁土層実測図他（1/40）



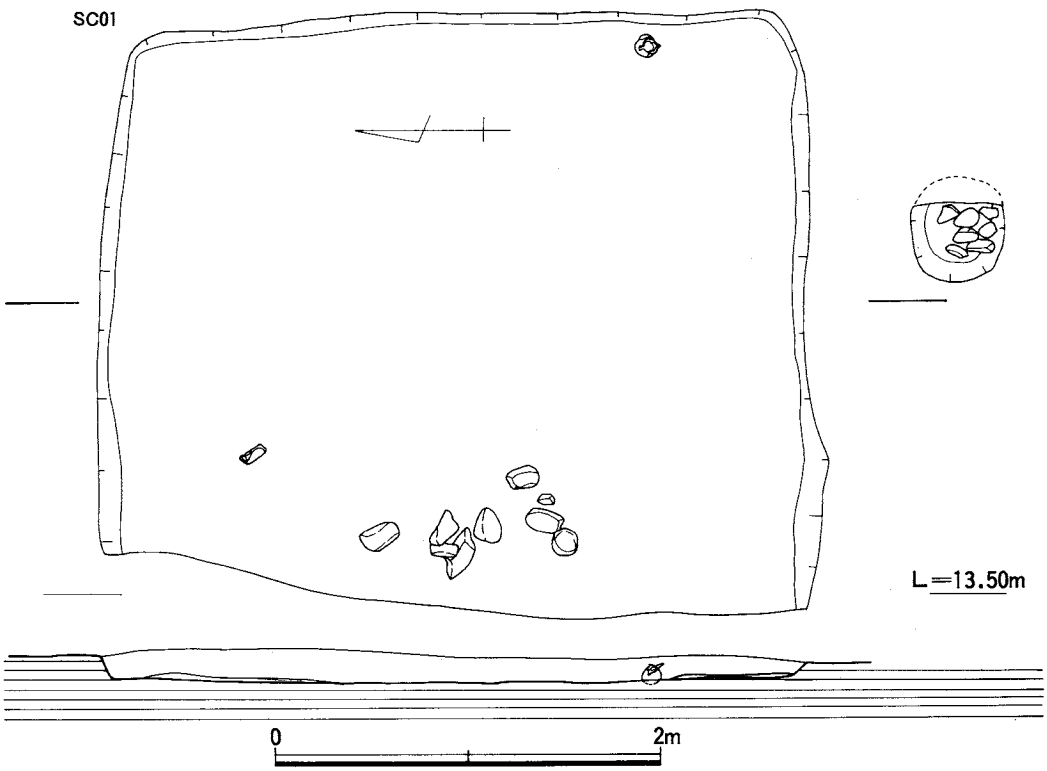
第11図　Ⅱ区全体図（1/250）

は50～60cm、水田面との比高10cmを測る。水田を覆っていた灰白色細砂からは、土師器杯、皿細片が出土している。

以下、Ⅱ区内の土層堆積について述べる。(第10図1)

1は南壁の土層図で、Ⅰ区南壁と同様にSD01の断面を切っている。①は現況の農道に伴う水路、②は灰黒色で、③は茶褐色土、④は灰褐色土、⑤は礫、酸化鉄を多量に含む明灰色土、⑥は灰白色砂で、②および③～⑥層は⑦層から掘り込まれている。③～⑥層は現況の水路が踏襲した1時期前の水路とみられる。⑦は暗灰褐色土で水田耕作土、⑧は明褐色で⑦の床土にあたる。Ⅰ区とは異なり、水田面は1面のみである。⑨は黒斑を含む明灰色土で、その下面が地山にあたる。⑨は⑩から掘り込まれている。⑩～⑬は灰色シルトと灰白色砂の互層で、⑪には酸化鉄が沈着している。SD01は⑭の灰白色シルトから掘り込まれている。⑭は下層の⑮は灰色シルトで、⑭、⑮では遺物は包含されていない。

調査対象区域外の県道大野二丈線とSD03より1町(109m)の中間地点から条里区割に関する遺構の存在が予想されたため、トレンチ調査による断面観察によりその検出を試みた。第10図2に図示する通り、時期は特定できないが、現況の農道の下から畦畔とみられる高まりと、溝と



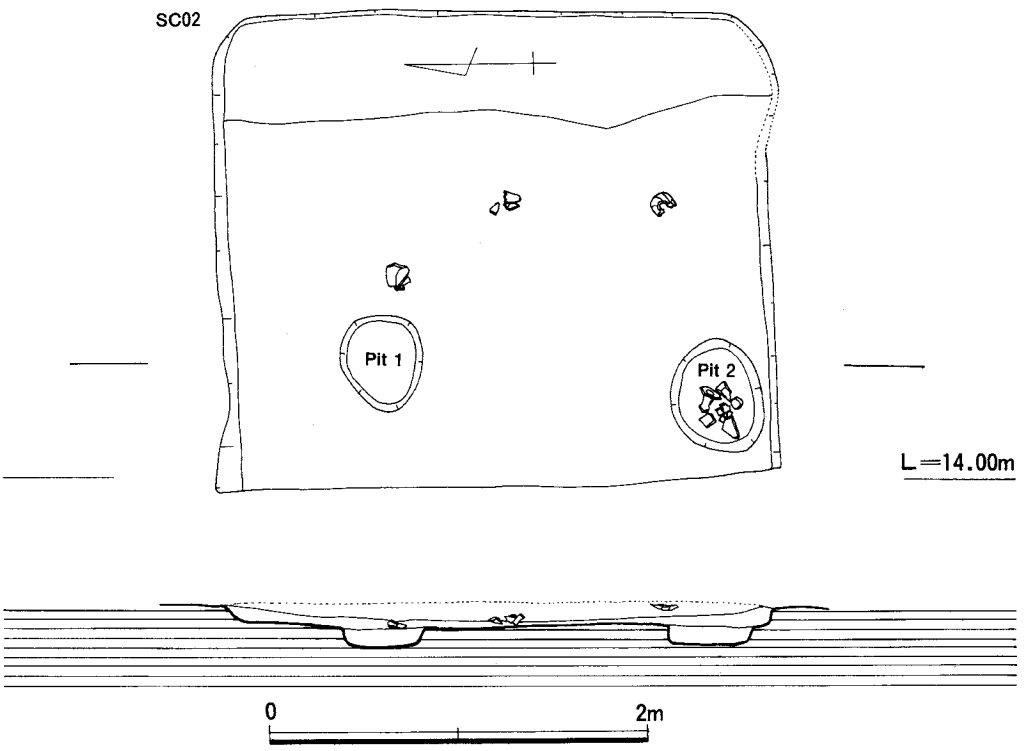
第12図　竪穴住居跡実測図　(1) (1/40)

みられる落ち込みが確認された。以下、西壁の土層堆積について述べる。①は後世の農道を営んだ際の盛土、②は砂、③は黄褐色土である。④は黄褐色土で、⑥から掘り込まれている溝とみられる落ち込みである。⑤は酸化鉄を多量に含む砂礫、⑥は砂混りの灰褐色土である。⑦は酸化鉄を含む灰褐色土、⑧は⑥に同じである。⑩の暗黄褐色土の上面に⑨の畦畔とみられる褐色土の高まりがみられる。

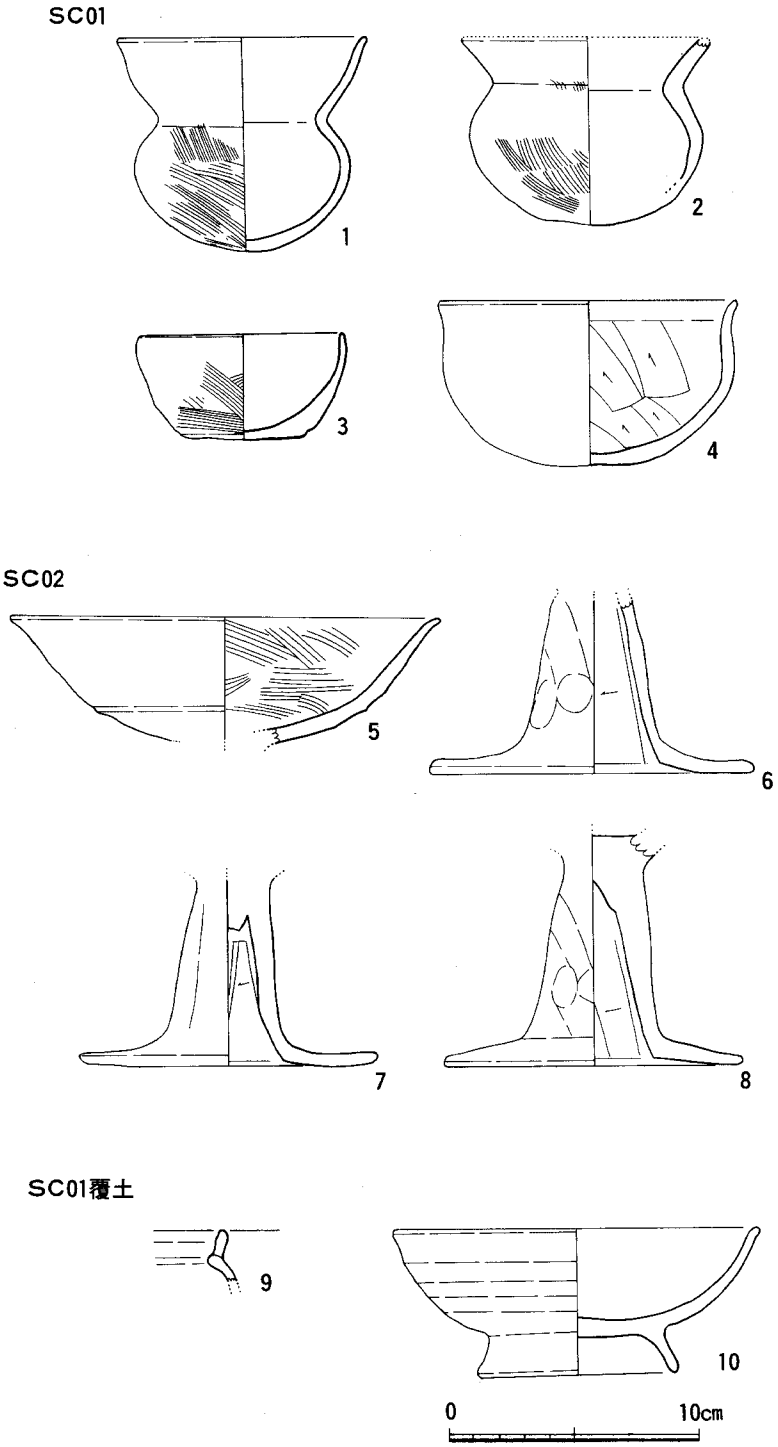
竪穴住居跡　Ⅱ区の北側で2軒検出した。2軒とも主軸方位を南北にとっている。南側からSC01、02と呼称する。(第12･13図)

SC01　Ⅱ区北端から南へ18m、西寄りの所で検出した。西側は調査区外へ延び、東側はSD01から切られている。南北長3.8mを測り、東西3.1m分を検出した。残存する床面までの深さは15cmを測る。床面から柱穴は検出し得なかった。床面西側中央部で円礫が集中し、土師器鉢が出土した。西南隅からは小型丸底壺が出土した。覆土からは破砕した状態で小型丸底壺、鉢片、二次堆積の縄文晩期精製浅鉢片が出土した。(第12図)

SC02　Ⅱ区北端から南へ10m、SC01の北4mの所で検出した。西側は調査区外へ延びる。南北長2.9mを測り、東西2.5m分を検出した。残存する床面までの深さ15cmを測る。西側で主



第13図　竪穴住居跡実測図 (2) (1/40)



第14図　Ⅱ区出土遺物実測図（1/3）

柱穴２つを検出した。柱穴間の距離は1.8ｍを測る。主柱穴の床面からの深さは10cmを測る。床面から高杯杯部１、高杯脚部２個体分、柱穴Pit2からは高杯脚部１個体分が出土した。(第13図)

出土遺物

(第14図)

SC01出土土器

土師器

小型丸底壺(1･2)

1は扁球形の胴部に長目の口頸部が内湾して開き、口縁部は外反する。口頸部外面から内面にかけて横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデ調整している。胎土には粗い砂粒を含み、その色調は黄褐色を呈し、赤色顔料を塗付する。口径9.8cm、器高8.5cm、胴部最大径8.8cmを測る。2は扁球形の胴部に口縁部が短く外反しながらのびる。屈曲部は肥厚し

内面ににぶい稜をなす。口縁端部は欠失する。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部は刷毛目調整、胴部上半はそれをナデ消している。胎土には砂粒を少量含み、色調は明黄褐色を呈する。器高7.5cm、胴部最大径9.5cmを測る。

鉢(3･4) **3**は約1/4の破片資料である。平底の底部で、体部との境にあたる屈曲部から内湾気味にのび、口縁部に向って器肉は薄くなる。体部外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土には砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。復元口径8.2cm、器高4.2cm、復元底径5.0cmを測る。**4**はやや平底の底部で、体部は丸味をもち、口縁部は外側に屈曲する。口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はナデ、内面はヘラ削り調整である。胎土には粗い砂粒を含み、色調は淡赤褐色を呈する。口径11.7cm、器高12.6cmを測る。

SC02出土土器

土師器

高杯 (**5**～**8**) **5**は**7**と接合関係の可能性あり。**5**の杯部は中位近くで不明瞭に屈曲し、上半部まで内湾気味に延び、口縁部近くで外反する。外面は横ナデ、内面は横斜位の刷毛目調整である。胎土には砂粒を含み、その色調は明赤褐色を呈する。赤色顔料を塗布する。口径16.8cmを測る。**6**～**8**は脚部で、筒部はわずかに中膨みし、下部で屈曲しほぼ水平な裾部をなす。脚裾部外面は横ナデ、内面はヘラ削りの後横ナデ、脚筒部の外面はナデ、内面はヘラ削りしている。

6は砂粒を多量に含む胎土で、黄褐色を呈する。**7**は砂粒を少量含む胎土で、その色調は明赤褐色を呈する。赤色顔料を塗布する。**8**は細かい砂粒を微量含む精良な胎土で、暗い赤褐色を呈する。

SD01出土土器

土師器

椀(**10**) 体部に丸味を持ち、外反する口縁部との境は不明瞭である。高台は高く外へふんばる。口縁部から高台まで、内外面とも横ナデ調整、高台内には板状圧痕がみられる。胎土には砂粒を少量含み、色調は明赤褐色を呈する。口径14.5cm、器高6.1cm、高台径8.1cmを測る。

その他の出土土器

浅鉢(**9**) SC01の覆土中に混入していた縄文時代晩期の浅鉢片である。黒灰色を呈す。

4 Ⅲ区の調査 (第15図)

検出遺構

Ⅲ区においては、**SD01**の残存状態は後世の削平により著しく損なわれ、底面に沈着した酸化鉄層を残すのみである。調査区北半部ではピット群を検出したが、調査区が7ｍ幅と狭く柵・掘立柱建物としてまとめることができなかった。ピットの内、遺物が出土したものは全体の1/3ほどで、掘方の径、深さは異なったグループとしてまとめることができる。ピットから出

土した遺物は、弥生時代中期土器細片、古式土師器甕、土師器皿・杯片、瓦器椀片と数時期に及ぶ。

それらの内、SX01からは古式土師器甕２個体分が破砕した状態で出土した。うち一点は口縁部が打ち欠かれており、合せ甕が攪乱を受けたものと考えられる。また、覆土からはガラス小玉27個が出土した。

Pit3からは越州窯系青磁底部片が、ヘラ切りの土師器杯底部細片に伴って出土している。

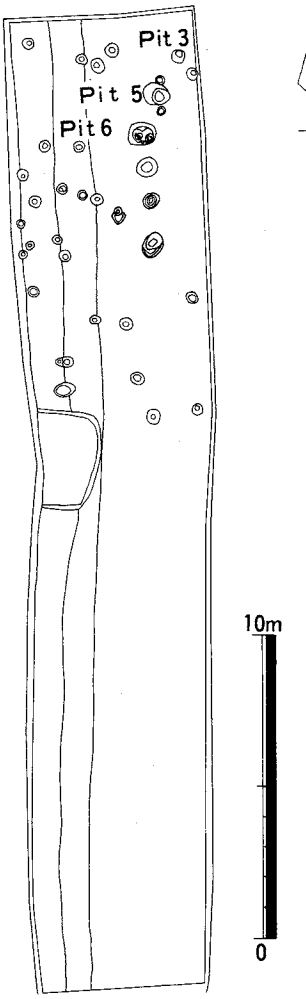
出土遺物（第16～18図）

土師器　SX01出土。(第17図)

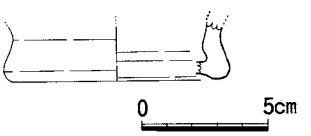
甕　**1**は倒卵形の胴部にく字形に開く口縁がつく。口縁上端はほぼ水平に近い平坦面をなす。屈曲部内面には丸味をもつ。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面上半部は横刷毛目で頸部付近ではナデ消し、下半部は縦刷毛目を施している。胴部内面は頸部より約１cm下から肩部までは図上左から右へ、肩部より下は左上りのヘラ削りを施す。胎土には砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。口径15.8cm、器高28.1cm、胴部最大径24.0を測る。**2**は倒卵形に近い球形の胴部をもち、口縁部は打ち欠かれている。胴部外面は刷毛目が施されているが、**1**の刷毛目が１cmにつき８本に対し、**2**は１cmにつき５本と粗く、部位による刷毛目の方向には規則性がない。器肉は**1**より厚手である。胎土には砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。胴部最大径23.4cmを測る。

青磁　Pit3出土。(第16図)

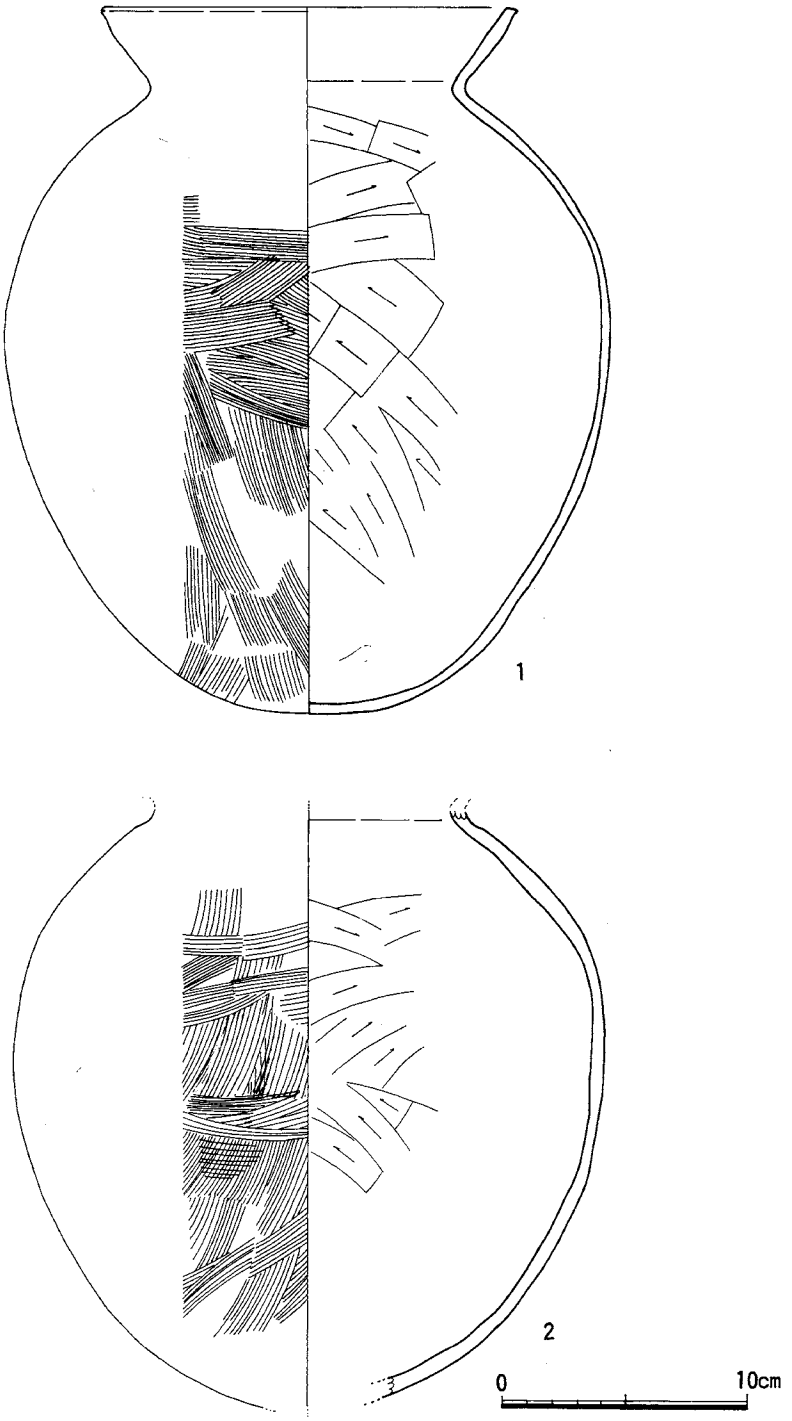
3は越州窯系青磁底部片である。器周残存約1/4の残存資料で、復元底径9.0cmを測る。高台は浅く削り出され、高台内に白色耐火土の目あとが残る。底部内面の屈曲は外面のものより下にあり、S字状に屈曲する。底部の厚さは、胴部の厚さ６mmに対し４mmと薄い。胎土は堅緻で、その色調は灰色を呈する。釉調は鈍い光沢をもつオリーブ色で、全面施釉した後に畳付から高台内にかけて釉をかき取っている。器内は露胎である。



第15図　Ⅲ区全体図（1/250）



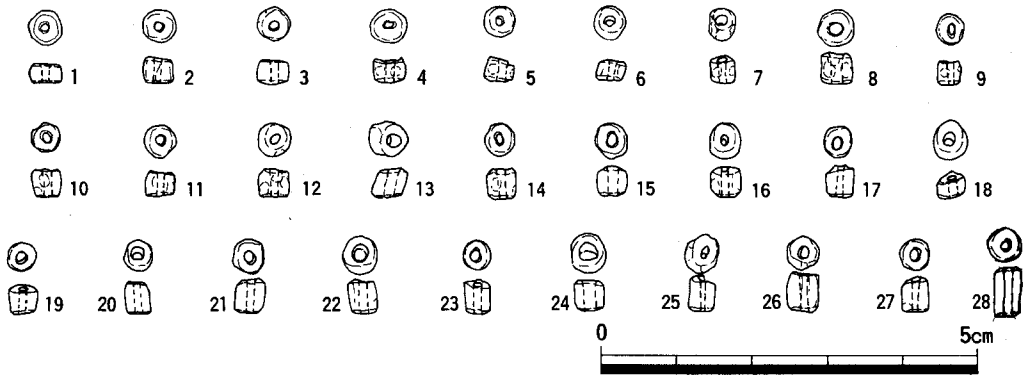
第16図　Pit3 出土遺物（1/3）



第17図　SX01 出土遺物実測図（1/3）

ガラス小玉　SX01出土。(第18図)

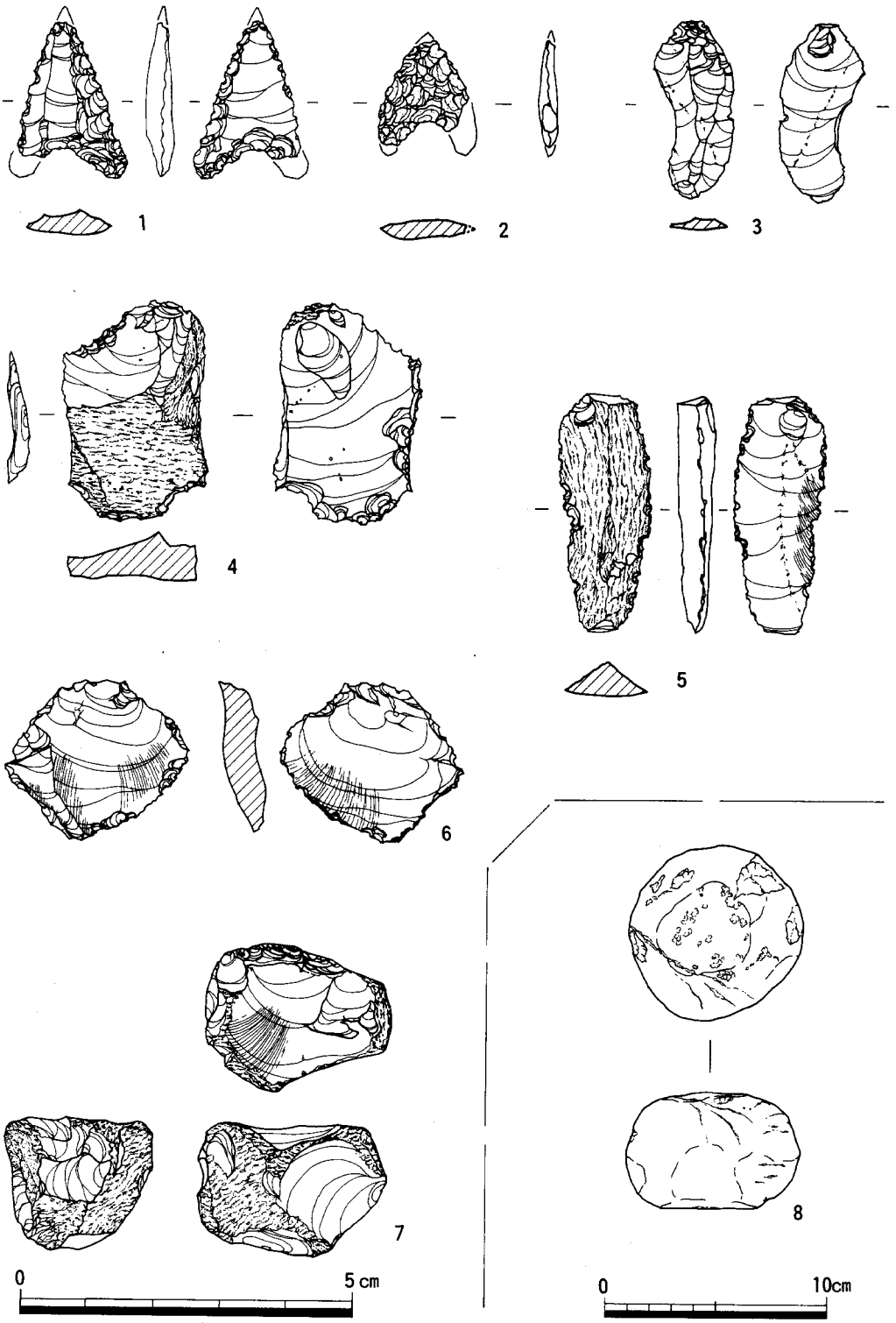
すべてコバルトブルー色のガラス製小玉である。色彩の極端な濃淡もなく、ほぼ同一の素材から一度に作られたものと考えられる。裁断後に研磨されているが、切り口（両小口）が研磨されていないものも見られる。(4,17,25,27)　また法量では径が3.5㎜から5.0㎜に納まりあまりばらつきがないのに対し、逆に高さは2.5㎜から6.5㎜の幅でばらつきが見られる。この場合の高さは裁断時の幅である。計28個体を数える。古墳時代前期の合せ甕の周辺から採集された一括資料であり、非日常的な性格を持つ。概期の集落内外に見られる埋納された「合せ甕」や「倒置甕」などの性格の究明を含めて今後の類例に注目したい。



第18図　ガラス小玉実測図（1/1）

No	径(㎜)	高(㎜)	重量(g)	No	径(㎜)	高(㎜)	重量(g)
1	4.5～4.0	2.5	0.1	15	4.5	4.0	0.1
2	4.0	3.5	0.1	16	5.0～4.0	4.5	0.05
3	4.5～4.0	3.0	0.1	17	4.5	4.5	0.1
4	5.0	3.0	0.1	18	4.5～5.0	3.5	0.1
5	4.0	3.0	0.1	19	4.0	4.0	0.05
6	4.5～4.0	3.0	0.1	20	4.0	4.0	0.05
7	3.5～4.5	3.5	0.1	21	4.5～4.7	4.5	0.15
8	5.0	4.0	0.1	22	4.5～5.0	4.0	0.1
9	4.0	3.0	0.1	23	4.0	4.0	0.07
10	4.0	3.5	0.1	24	4.5	4.0	0.15
11	4.0～4.5	3.5	0.1	25	5.0～4.0	5.0	0.15
12	4.5	3.5	0.1	26	4.5	5.0	0.15
13	5.0	4.0	0.1	27	4.0	4.5	0.1
14	4.0～4.5	4.0	0.1	28	4.0～4.5	6.5	0.18

ガラス小玉計測表



第19図　各区出土石器実測図

石器　1はⅢ区Pit6出土、2～8はⅠ区SD01出土で、いずれも二次堆積のもので周辺にそれら時期の遺構の存在、開墾による遺構の削平が考えられる。

今回出土した石器の総数は18点で、その内訳は黒曜石製の石鏃1点、安山岩質製の石鏃1点、黒曜石製の二次加工のある剥片1点と使用痕のある剥片3点と剥片6点、安山岩質の剥片1点。黒曜石製の石核2点と石核片2点。それに敲打具1点が出土している。そのうちの8点についてのみを図示している。(第19図) 以下その説明をおこなう。

1はいわゆる狭義の剥片鏃である。いわゆる鈴桶タイプの縦長剥片を素材とし主要剥離面の打点を先端にし両側から剥離を加え形成している。先端と基部左側が欠損するが、先端は加工再生されている。**2**は安山岩を素材とする石鏃で、長幅比が1.3程度のややずんぐりした形状で抉りは広くゆるい。先端と基部右側が欠損する。ローリングを受けたため稜が鈍化している。**3**は黒曜石の剥片である。3㎝にも満たない小さな縦長剥片で、剥離方向は主要剥離面とその背面すべてが同一の方向である。打面に自然面が残されている。使用痕などはない。完形を保つ。**4**は黒曜石製の二次加工のある剥片である。打面とその他2面に自然面を残しておりこれが原石の表皮部分の剥片であることがわかる。三辺に不規則な二次的な剥離加工が施されている。かなりローリングを受け傷ついている。**5**も黒曜石製の小形縦長剥片で、主要剥離面以外はすべて原石の表皮部分であるが研磨されている。使用によると思われる剥離が両側に見られる。**6**も黒曜石を素材とする横長剥片である。縁辺部のやや反ったエッヂ部分に使用によると思われる不規則な小剥離が見られる。**7**は黒曜石の石核である。かなり不規則な八面体でそのうちの一面に自然面が残っている。一番大きな面で2.2×2.1㎝、一番小さな面で0.6×2.1㎝たらずの極小のもので、これ以上の剥離は困難であり石核としては使用の最終段階に至ったものと思われる。ローリングを受けかなり傷ついている。これらの石器の時期はその石器の持つ特徴から縄文時代中後期から晩期に比定され、この時期の包含層がかつてあったことを示している。概期の土器としてSC01出土の晩期前半の精製浅鉢片が見られる。また石材として使用された黒曜石は肉眼観察による限りでは佐賀腰岳産のものと思われる。

8は変成岩系の石材を用いた敲打具と思われ、両極に平坦面を持つ。弥生中期頃の所産か。

番　号	出　　土	名　　称	全　長	幅	厚　さ	重　量	石　　材
1	Ⅲ区　Pit 6	剥片鏃	2.3 ×	1.6 ×	0.4	1.15	黒曜石
2	Ⅰ区　SD01	石　鏃	1.6 ×	1.5 ×	0.3	0.65	安山岩
3	Ⅰ区　〃	剥　片	2.6	1.2	0.2	0.7	黒曜石
4	Ⅰ区　〃	R　F	3.3	2.2	0.8	5.55	〃
5	Ⅰ区　〃	U　F	3.6	1.4	0.5	2.35	〃
6	Ⅰ区　〃	〃	2.4	2.8	0.6	3.9	〃
7	Ⅰ区　〃	石　核	2.8	2.0	2.3	13.25	〃
8	Ⅰ区　〃	敲打具	5.0	7.9	5.9	507	片麻岩

×＝欠損時の値　RF＝2次加工のある剥片　UF＝使用痕のある剥片

出土石器計測表

Ⅳ 小　結

限られた幅7.5ｍ、長さ240ｍの線的な調査区域ながら、田村遺跡群の面的な拡がりをある程度把握することができた。また、新たな問題点を残した。

第７次調査の遺構時期は、古墳時代と中世に大別される。古墳時代の遺構は当調査区域の北側70ｍの範囲に限られる。Ⅱ区北端で竪穴住居跡２軒検出したが、残存状態は良くなく、調査区外に遺構がかかることも加わり、その全容を知ることができなかった。床面出土の土器からこの２軒は５世紀前半の時期が考えられる。Ⅲ区北半部で検出したピット群の内、SX01は旧状をとどめていなかったが、甕棺墓と考えられる。４世紀後半に時期を比定できよう。攪乱された覆土からガラス小玉の出土をみたが、その副葬が棺内か棺外か疑問を残す。

中世の遺構はSD01を中心とする溝、土壙、柱穴等の遺構である。SD01Ⅰ区出土の遺物は、12世紀後半から13世紀までの時期幅を持っている。在地の土師器、瓦器とほぼ対等な量の中国輸入陶磁器、若干の東播系須恵器、滑石製石鍋といった移入品がみられることは、野芥庄に比定される当地域を支配していた階層の交易圏をうかがう上で興味深い。

Ⅰ区で、SD01からまとまった量の遺物が出土し、その脇で土壙、柱穴が検出されたのに対し、Ⅱ区ではSD01出土遺物の量は調査区面積がⅠ区の４倍であるにもかかわらずⅠ区の８分の１にも満たない。そのことをⅡ区内で水田と畦畔の一部が検出されたことと併せ考えれば、Ⅰ区周辺域を生活の場（集落址）、Ⅱ区周辺域を生産の場（水田址）と推測できよう。

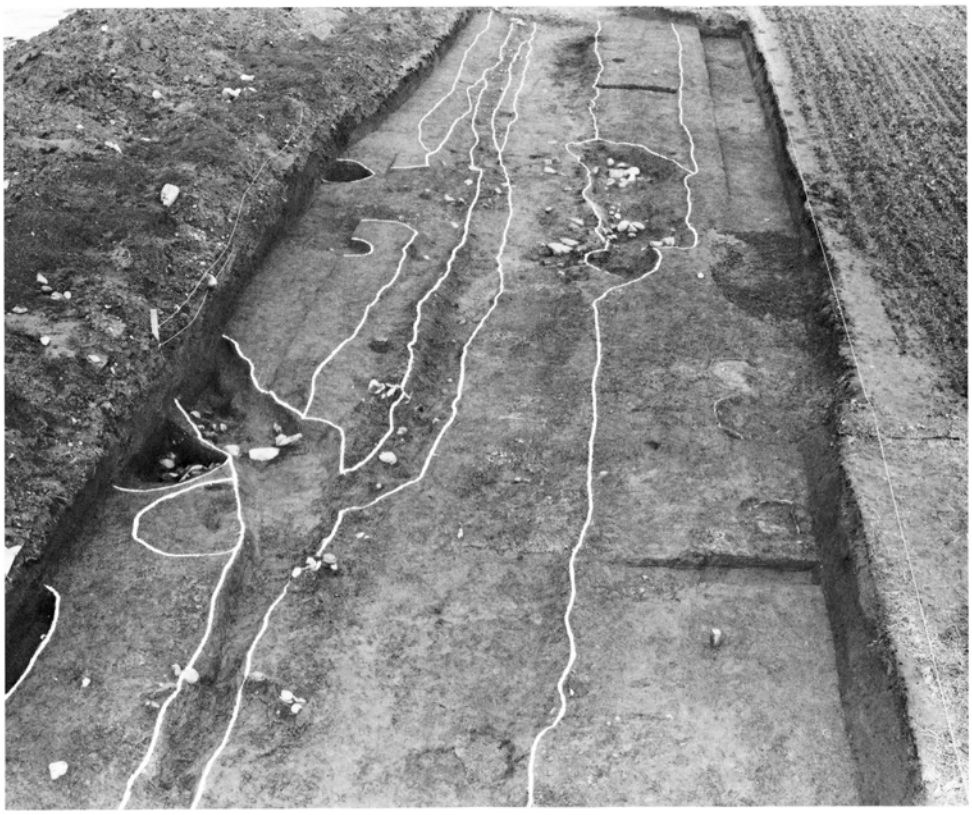
第５次調査区域では、SD01から１町(109ｍ)東に離れた所で、SD01と平行する大溝が検出された。またその方位に主軸をとる掘立柱建物群も溝周辺域を中心に検出され、溝以前の建物跡と様相を異にする。条里区割に沿った溝と集落の関係、条里区割成立の時期などSD01に残された問題点については、第５次調査報告で一連の遺構と併せて考察する。

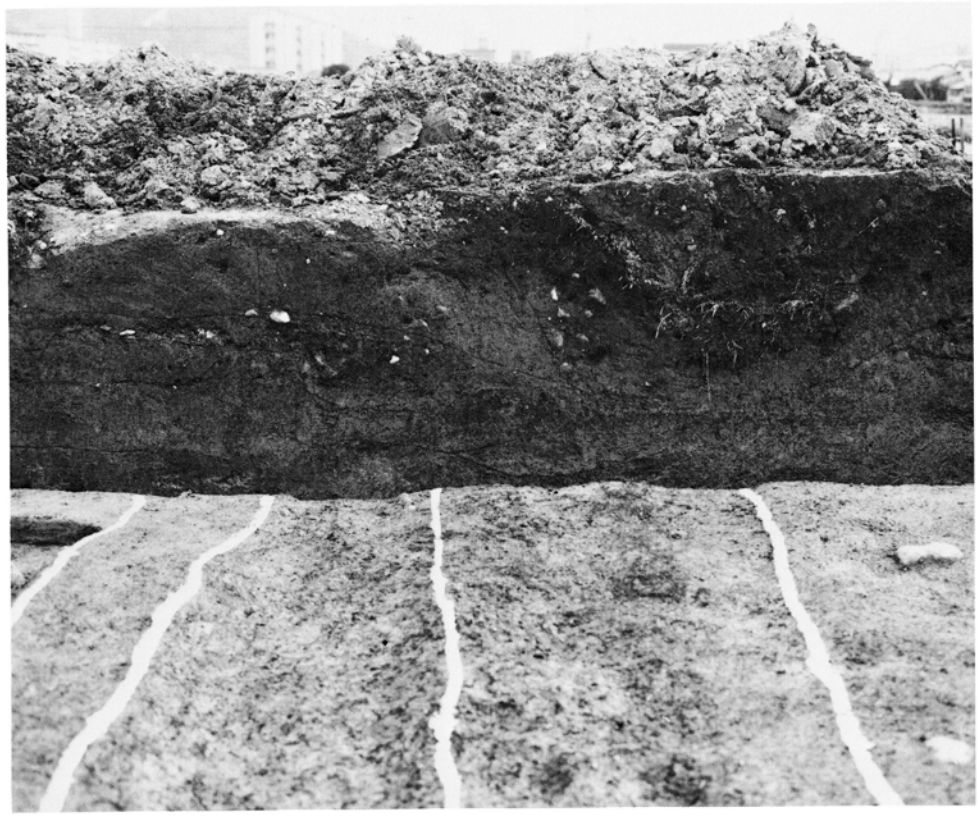
図　　版

田村遺跡群空中写真

▲Ⅰ区調査全景（北から）

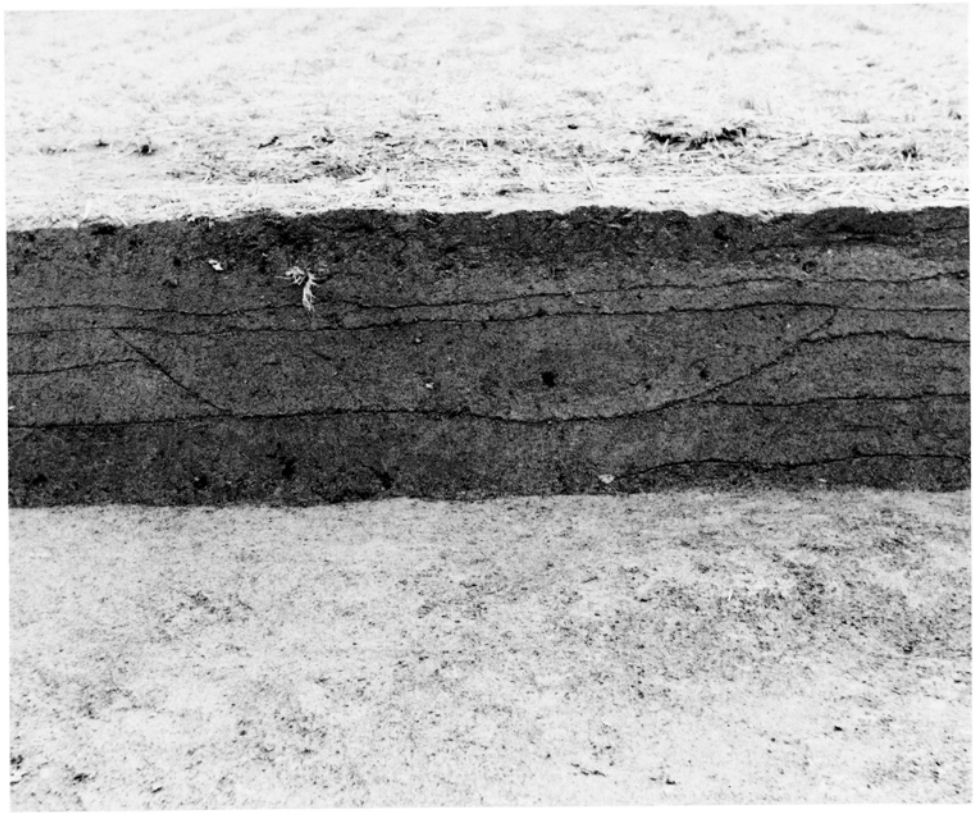
Ⅰ区調査全景（南から）▼





▲Ⅰ区南壁土層状態

Ⅰ区東壁土層状態▼

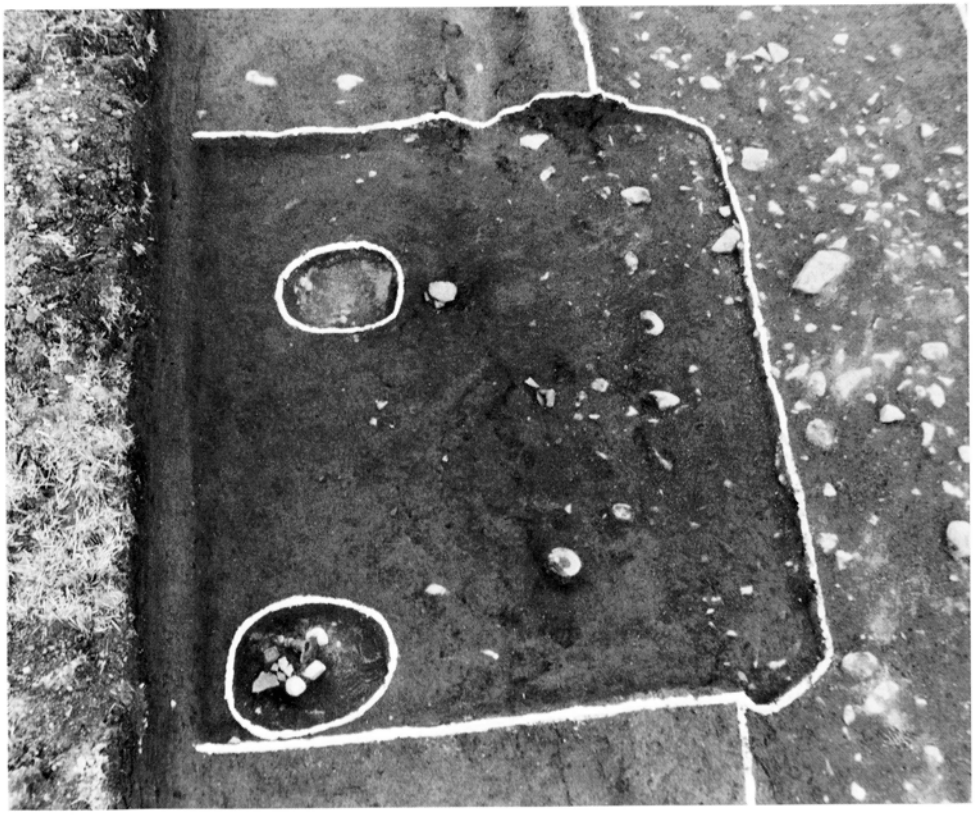


▲Ⅱ区調査区南側（北から）

Ⅱ区調査区全景（南から）▼

▲Ⅱ区竪穴住居ＳＣ01（北から）

Ⅱ区竪穴住居ＳＣ02（南から）▼

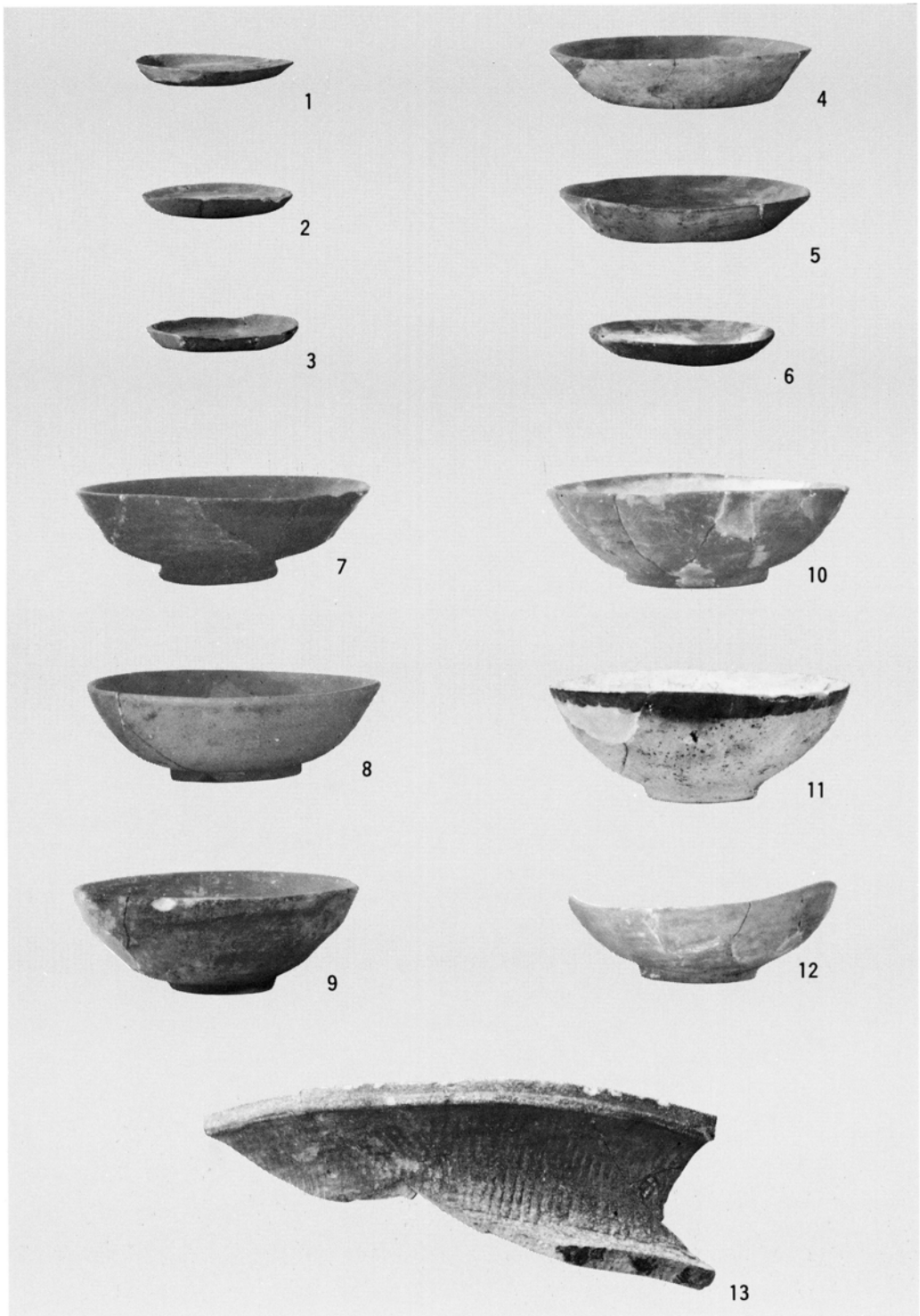


▲Ⅲ区調査区北側（北から）

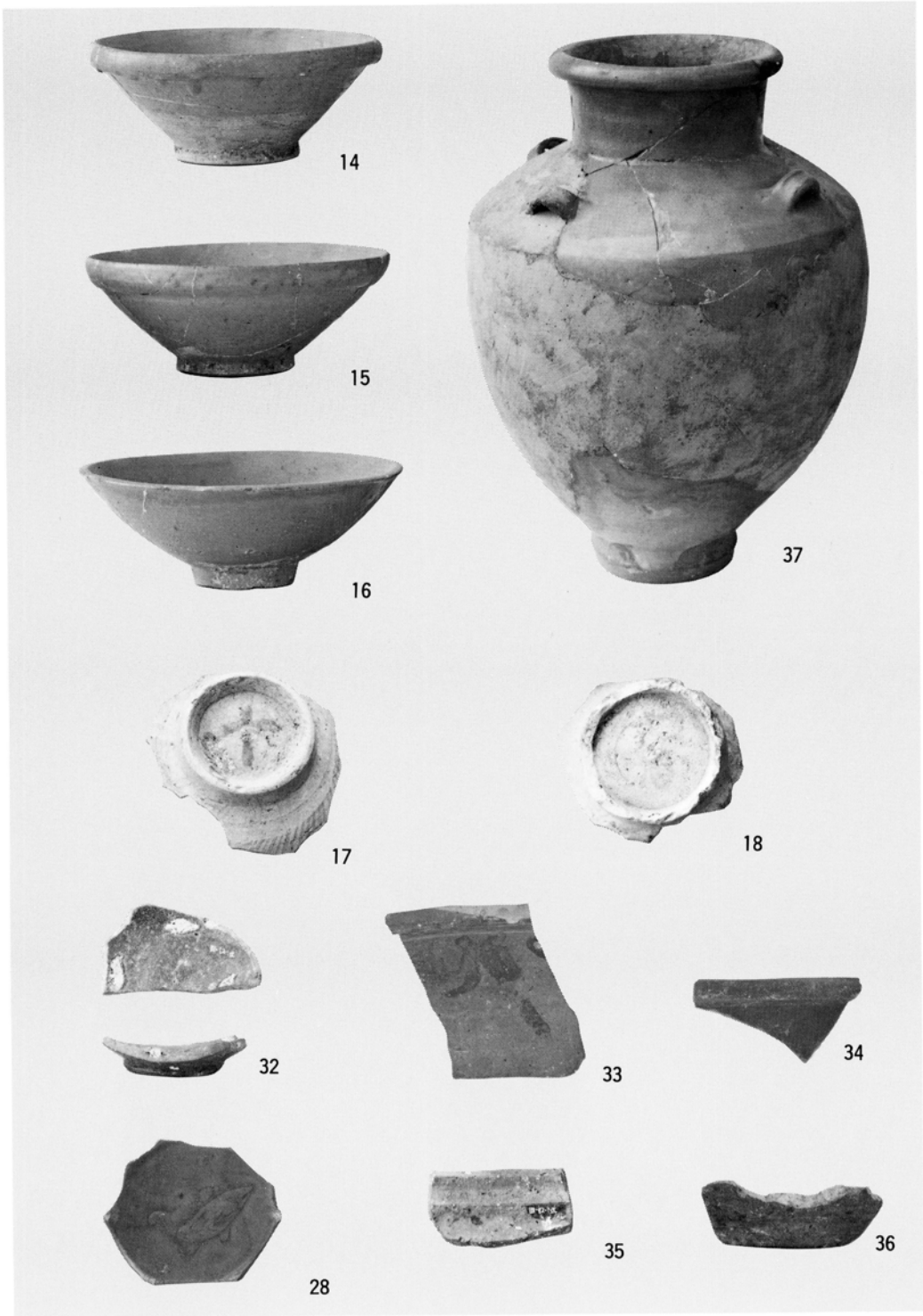
Ⅲ区調査区北側（南から）▼

▲Ⅱ区調査区全景空中写真（北から）

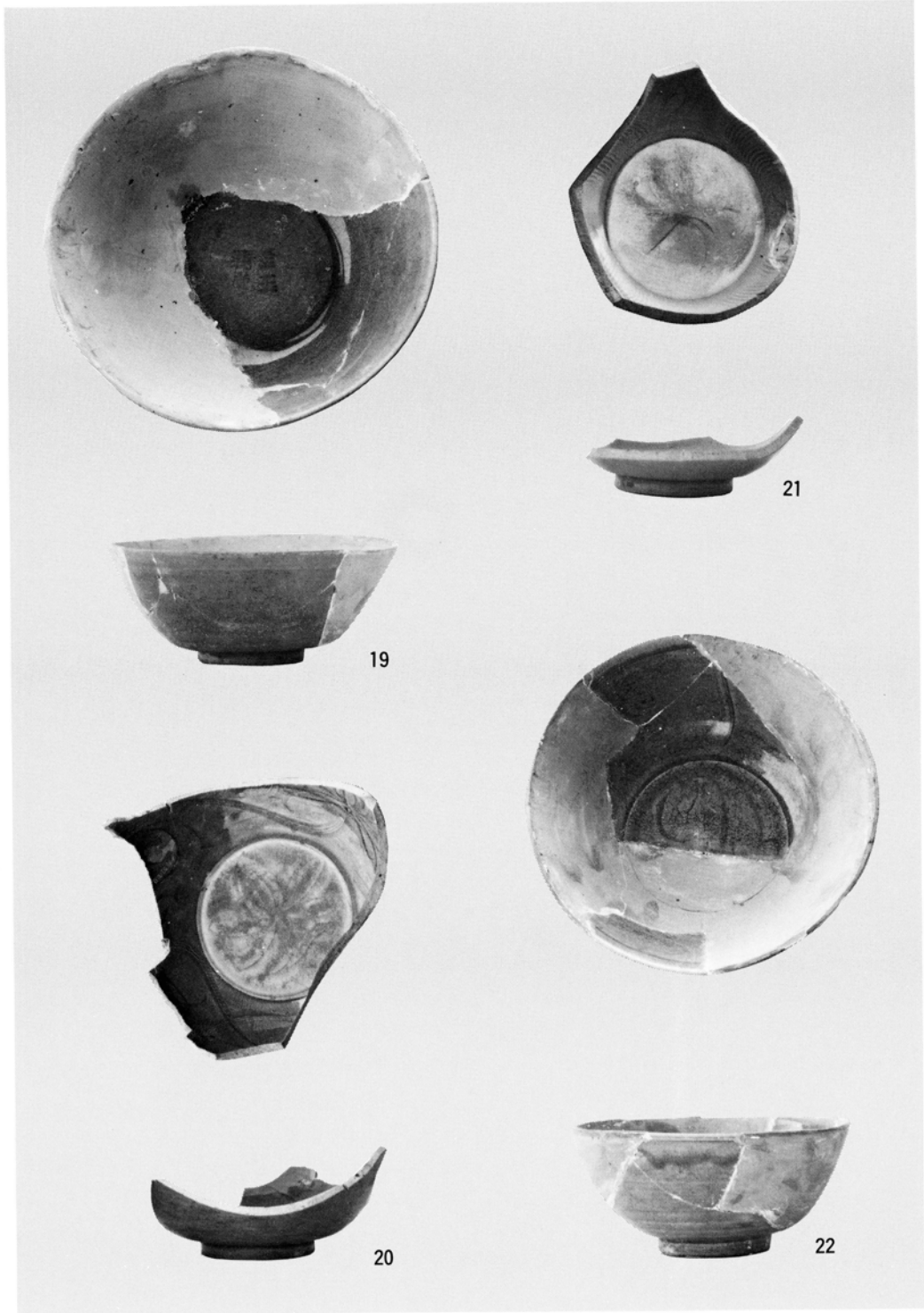
Ⅱ区調査区全景空中写真▼



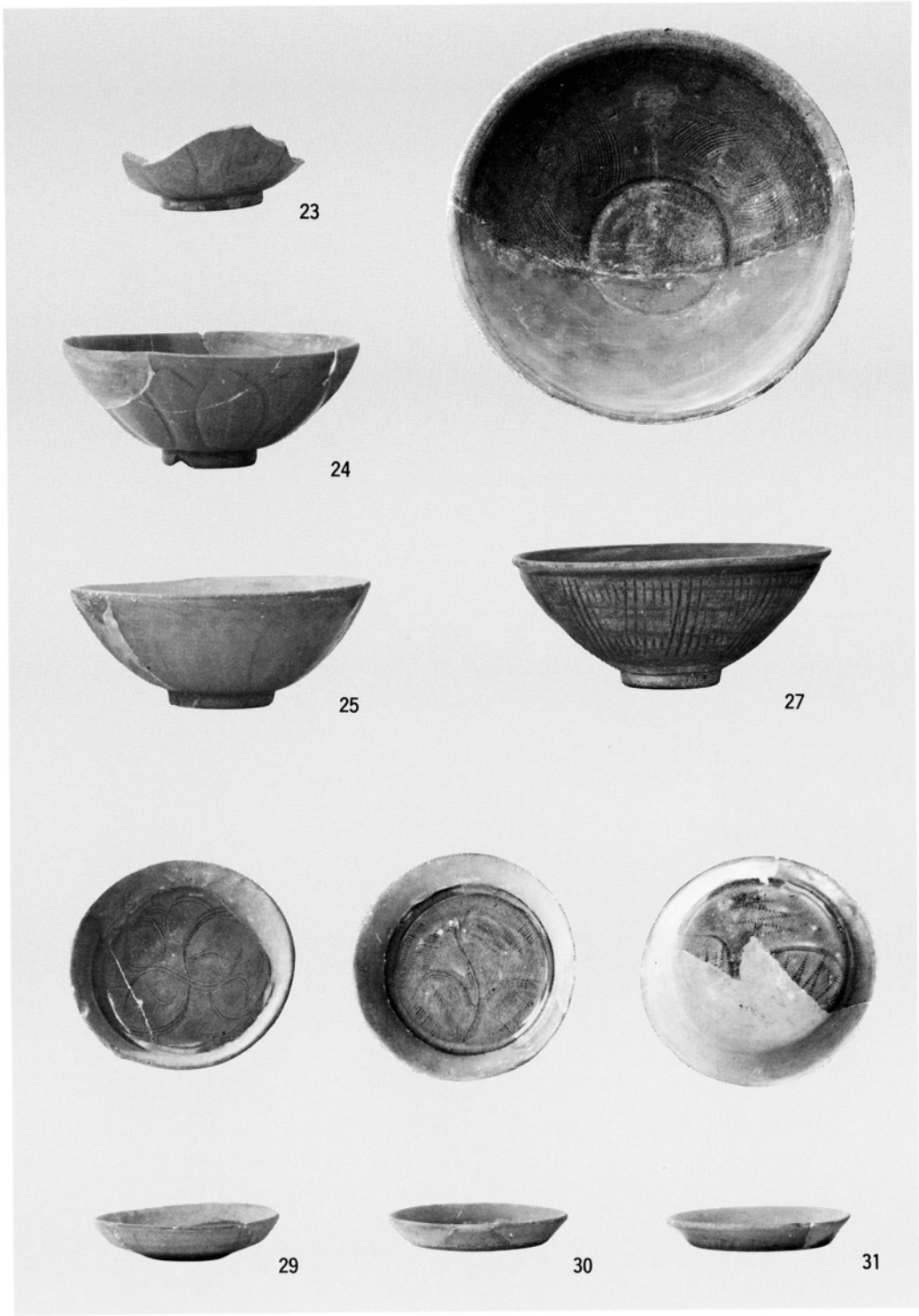
Ⅰ区出土土器(1)



Ⅰ区出土陶磁器(1)



Ⅰ区出土陶磁器(2)



Ⅰ区出土陶磁器(3)

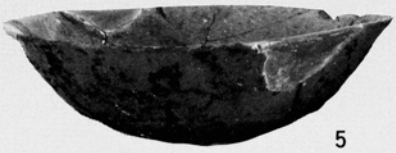
1

2

3

4

Ⅱ区ＳＣ01出土土器


5

6

7

8

Ⅱ区ＳＣ01出土土器

Ⅱ区ＳＤ01出土土器

Ⅲ区Pit　3出土陶磁器

1

2

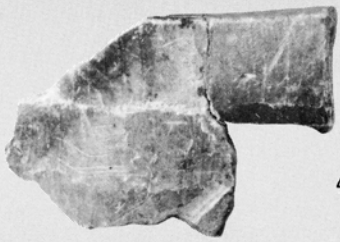
Ⅲ区ＳＸ01出土土器

38

39

40

41


42

Ⅰ区出土滑石製石鍋

Ⅲ区ＳＸ01出土ガラス小玉

各区出土石器

田村遺跡第５次調査区全景空中写真（北から）
大溝と掘立柱建物より構成される集落

図版15

福岡市早良区
田村遺跡
－Ⅳ－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集
1987年3月31日

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10の29

印刷　ダイヤモンド印刷株式会社